

第78号

会報

一般社団法人 函館文化会

〒042-0955 函館市高丘町51番1号
学校法人野又学園 函館大学内

電話・FAX (0138) 57-1175

E-mail bunkakai@host.or.jp

平成28年度定時総会を開催 ～会長に金山正智氏就任～

一般社団法人函館文化会では、平成28年度定時総会を5月24日(火)午後1時30分から五島軒本店において、会員総数97名のうち77名が出席（委任状出席を含む）して開催、提出された議案は全て原案のとおり承認し、また、任期満了に伴う次期役員については満場一致で選任され、終了いたしました。

以下、定時総会の内容について、お知らせいたします。

定時総会は安島進会長の挨拶の後、定款の定めにより会長が議長となり議事に入りました。

今総会に提案された議案は

- 議案第1号 平成27年度事業報告について
- 議案第2号 平成27年度収支決算について
- 議案第3号 定款の一部改正について
- 議案第4号 役員（理事・監事）の選任について

の4議案で、議案第1号と議案第2号は関連があることから事務局から一括して説明、次いで監事から5月19日実施した監査について「経理については正確かつ適正に執行されており、また、事業も事業計画に基づき適正に行われていると認める」との監査結果の報告があり、質疑の後採決を行い、いずれの議案も満場一致で承認されました。

(1次のページに)



函館文化会 会報 第78号 目次

平成28年度定時総会を開催 ～会長に金山正智氏就任～	1	第13回卓話 江差の風土と文化 文芸誌「江さし草」発行人・代表 松村 隆	18
会長に就任して 会長 金山 正智	2	函館文化会講演会 開催案内	21
退任ご挨拶 前会長 安島 進	3	文化会会員の募集・助成制度	21
函館文化会事務所移転のお知らせ	3	特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ① ～テーマ「青函連絡船」～	
平成27年神山茂賞 松村 隆氏に贈呈	4	青函連絡船は「はにゅうの宿」 小原 幸男	22
寄稿・神山茂賞を受賞して 松村 隆	4	青函連絡船の思い出 船矢 美幸	24
函館文化会講演会 開催報告	6	忘れられない「洞爺丸事故」 秋保 榮	25
平成27年講演会・講演録 開港地函館に見る芸術・文化 北海道立函館美術館主任学芸員 大下 智一	6	我が人生と「青函連絡船」 山那 順一	27
市民公開講座 第1回「函館弁」の持つ可能性について 函館大学専任講師 角田美知江	10	特別寄稿・日魯創業100年に思う ニチロ会顧問 加藤 清郎	29
卓話 第12回卓話 悪戦苦闘で完歩した「江戸五街道」 箱館歴史散歩の会主宰 中尾 仁彦	14	会務報告 平成27年度事業報告・収支決算	31
		函館文化会会員名簿（H28.10.1現在）	34
		編集後記	34

なお、承認されました平成27年度事業報告書、収支計算書は別掲（31ページ）のとおりです。

次に、議案第3号の定款の一部改正については、事務事業の見直しにより予算の議決をこれまでの総会から理事会に改めるもので、原案のとおり可決されました。本定款の改正により3月に開催している予算議決のための臨時総会は開催いたしません。

議案第4号については、任期満了に伴い役員（理事・監事）の選任が行われ、選任後総会を休憩しての理事会にお

いて、理事の互選により会長、副会長及び常務理事が選任されました。新役員は、次のとおりです。

また、平成28年度事業計画、収支予算を審議する平成27年度臨時総会は、2月23日ロワジュールホテル函館において会員76名の出席（委任状出席を含む）のもと開催、函館文化会事務所の移転について、をはじめ平成28年度事業計画など提案された全ての議案を満場一致で原案のとおり可決されております。

一般社団法人 函館文化会 役員名簿

(平成28年5月24日選任)

○顧問	安島進	○理事	池上信廣	○理事	平昭世
			繪面和子		田村志朗
○会長	金山正智		小笠原孝		三浦稔
○副会長	池見厚一		小笠原愈		若山直
	平原康宏		小原幸男	○監事	向出清治
○常務理事	叶邦武		櫻井健治		山田涼子

就任挨拶



会長に就任して

一般社団法人 函館文化会 会長 金山正智

過日の総会で、安島進前会長の後任として選任いただきました。戸惑いの中ではありますが、会員の皆さんと力を合わせ、函館の文化活動の応援団として一層心を込めた活動を組み立ててまいりたいと思っております。

北海道新幹線が待望の初営業を開始してから、函館のまちは以前にもまして人の出入りが激しくなり、新しい時代の到来を期待する高揚感に包まれています。そんな中で昭和63年、青函トンネルが開通したころの、函館の文化・芸術活動の沸き立つような状況を思い起こしております。

この年、青函博覧会に併せて「函館野外劇」が第一回公演を行い、その後、「函館ミュージカル劇場」の発足、「函館子ども歌舞伎」の旗揚げ、「函館市民オペラの会」の結成と、やがて函館の顔となる事業が矢継ぎ早にスタートしています。いずれもが総合的な文化・芸術活動で、演劇、舞踊、音楽などさまざまなジャンルに関わる市民の膨大なエネルギーの集約がなければ、とうてい成立しえない舞台でありました。時を経て、これらの舞台は、全国各地の活動団体とつながりを深めながら成長し、やがて函館は、特色ある地域文化を育むまちとして、全国から注目されるようになります。芸術・文化的発想力、それを実現に移す行動力、組織力がこの時期に、しかも比較的短期間の中で集中的に表出したことを懐かしく思い起こしております。

同じころですが、当時の函館は、函館山麓を中心にマンションなど高層ビルの建築が進められる一方で、まちの歴史を伝える古民家の取り壊しが続いておりました。歴史的な函館の街並みが徐々に変容することに危機感を持った市民は、美しい自然や景観を函館の財産として守っていくと活動し、街ぐるみで展開するようになります。函館のまちづくりをど

う進めるか、その在り方について市民が等しく考えを深め、行動していた時期でありました。

この芸術活動と景観保全活動はどこか似通った趣を持っているように思われます。どちらも函館の文化的な底力といえますか、このまちが培ってきた伝統の力とでもいいますか、それが一挙に顔を出した活動であるように感じられます。こうした「函館の心」を育む営みが、今も「函館学」「函館検定」などの活動の中で、着実に進められていることはまことにうれしいことです。

あれから四半世紀が過ぎて、海峡から再び新しい風が吹いてきています。私ども函館文化会は、このまちが伝えてきた函館の心を大切にしながら、新しい力を生み出す真摯な活動をこれからも進めてまいりたいと思っております。今後ともお力添えをお願い申し上げます。

退任挨拶



退任ご挨拶

一般社団法人 函館文化会 前会長 **安島 進**

平成19年度の総会において退任された、前会長 関 輝夫氏の後任としてその大役をお引き受けして以来、9年間もの長きにわたり皆様のご協力の下にその責めを果たして参りました。

改めてここまで賜りましたご支援、ご協力に感謝申し上げます。有難うございました。幸い去る5月24日の定時総会において、後任の会長として理事の金山正智氏にご就任いただくことが出来ました。会員皆様のご配慮に心よりお礼申し上げます。

在任中、平成20年には(現)函館文化会設立50周年、平成23年には函館文化会創設130周年を迎え、記念講演会の実施や函館文化会沿革史の発刊に携わることが出来ました。また、会員の所属意識涵養の一助として、総会の後に「卓話」を実施しました。当初、会員の体験的若しくは専門、趣味等の発表の機会として始めましたが、今日では外部講師も招いて実施され、総会への会員の出席率にも好影響が見られるようになったことは嬉しいことでした。

最大の難題であった函館厚生院看護専門学校の改築に伴い、長年お世話になっていた文化会事務局の移転問題、期限は「平成27度末」でしたが、3月1日に野又学園「函館大学」校舎内に移転完了を見ることが出来ました。

この間における野又学園の学園長様並びに理事長様はじめ、函館大学の教職員各位のご理解、ご配慮に深く感謝申し上げます。

お陰様で新年度から函館文化会の活動内容にも「学園」という学びの環境を活かした新たな進展が期待されるとともに、新機軸に基づく文化会の充実・発展にも期待したいと思います。

皆様から賜りました在任中のご支援・ご協力にお礼を申し上げ、退任のご挨拶といたします。

函館文化会 事務所移転のお知らせ

函館文化会の事務所は、永年、社会福祉法人函館厚生院のご厚意により函館厚生院看護専門学校を借用しておりましたが、同学校の移転改築に伴い退去することとなり、この度、学校法人野又学園の深いご理解とご協力を得て、函館大学内に移転し業務を行っております。

この移転を機に、郷土の文化のさらなる振興発展を目指してまいりますので、今後ともご支援・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

- ・事務所移転日 平成28年3月1日(火)
- ・新住所 〒042-0955 函館市高丘町51番1号 学校法人野又学園 函館大学内
- ・新電話番号 (0138) 57-1175

平成27年 神山茂賞

～文芸誌「江さし草」発行人・代表 松村 隆氏に贈呈～

函館文化会では、平成27年「神山茂賞」を文芸誌「江さし草」発行人・代表 松村 隆氏に贈呈しました。

贈呈式は、故神山茂氏のご命日にあたる平成27年11月7日五島軒本店で行われ、式後、松村 隆氏を囲んで祝賀会を開催しました。

「神山茂賞」を受賞されました松村 隆氏は、昭和38年に「江差フォトクラブ」を創設、以後会長として江差地方の歴史・文化・風土をテーマに写真展などの活動を続け、さらに、平成5年からは文芸誌「江さし草」の代表兼編集者を務め、江差地方の風土・文化を発掘しつつ、季刊で定期発刊を続け同誌は現在159号に達しております。

また、檜山地方の生活文化を芸術的ともいえる写真で記録するとともに、主に当事者からの聞き書きの手法でより深く掘り下げ、特に、文献史料の少なかった民謡・江差追分の歴史と現状を明らかにし、氏ならではの「江差追分史」をまとめ上げた功績は大きいものがあります。

写真による記録をはじめて以来60年にも及ぶ研究は、姥神大神宮渡御祭、北前船、江差の文化と歴史的町並み・風土、円空仏、阿弥陀寺史、J R江差線など檜山地方の近世から近現代史に至る幅広い分野に及んでいます。また、近年は、自らのシベリア抑留等の戦争体験を語り継ぐ活動にも積極的に取り組んでおります。

このように、郷土の歴史・文化を後世に伝える活動は、郷土史に対する底辺の拡大、人材育成に繋がるとともに、郷土史研究に大きな足跡を残していると評価されたものであり、これからの一層の活躍が期待されているところであります。

この度の受賞にあたって、松村 隆氏から「神山 茂賞を受賞して」と題し玉稿をいただきましたので、紹介いたします。



神山茂賞を受賞して — 江差の文化風土を思う —

文芸誌「江さし草」発行人・代表 松村 隆

江差の文化に関心を持つようになったのはいつころだったろうか…。

江差の街から10キロほど離れた厚沢部川の河口に張り付いた小さな集落に生まれ育った私が、江差の町に住み着いたのは1955年（昭和30）だった。

その頃街には、廻船問屋の古い家並みが北前船交易の残影を偲ばせていた。

カメラに興味を抱きようやく手に入れたところで、江差とはどんな町かと、思考錯誤しながら映像を追い続けたことで文化に触れるきっかけになったように思う。

街には日本海航路の終着港として繁栄を極めた文化が生活に根付いて今に伝えられている。それは松前の城下町と対比される商港で、古くは蝦夷地の玄関口の役割を担った商人文化であった。

町の行政職で経済部門を担当し、町並みや江差追分にかかわるようになって、北前船文化の奥深さ、とりわけ江差追分節に秘められた計り知れない魅力とその影響力は目を見張るものがあった。唄を愛好する庶民から有識者まで全国すべての人々の心を惹きつける魅力は何か。これほどの唄が北国の小さな港町にどうして歌い継がれてきたのか。その謎を理解したいと追い続けるようになっていた。やがてその保存伝承拠点となる江差追分会館の建設構想を手掛けたことが、その後の生き方の転機になったように思う。町にとって江差追分は民謡の域を超え地域の文化として位置づけられていた。

追分会館は江差の歴史文化を表徴する拠点施設で、北海道大学建築工学科街並み工学の権威、足達富士夫、越野武教授陣のプロジェクトを立ち上げた初めての取り組みであった。資金調達から補助事業制約と難題をクリアして3年がかりで1982年（昭和57）オープンにこぎつけた。廻船問屋の街並みを取り入れ、瓦葺土蔵デザインで江差らしさを見事に再現していた。

「江差の文化を創造したい」という意欲の取り組みで、役所人生で最も達成感を実感した仕事になった。そして退職後、追分会館の館長に再就職の機会を得て、江差追分の本質を追う意欲をかきたてられた。就任して追分の習得に取り組む「江差追分セミナー」講座を開設、厳冬2月にもかかわらず全国から自費負担で参加する愛好者の熱意に感動させられた。大会を目指す巧みな歌手だけではなく、楽しむだけでなく、心の支えに歌う情念が込められていた。

退職を機に「自分のやりたいことだけをやろう。自分流に生きよう」周囲を気にせず自分の好きな道を歩こうと決めた。その手始めが同人誌『江さし草』に参加しての物書きだった。しかし物書きの知識があったわけでもなく、恥かき覚悟の執筆だった。江差の文化風土に心惹かれ、追分に執念をかける人々取材し追分の本質を追い続けた。その感動をテーマに『追分ひと模様』を応募、手探りで始めた文筆活動が北海道新聞第3回「いさり火文学賞」を受賞した。またまた追分の文化力に背中を押された思い

だった。

物書き分野では、同人誌『江さし草』の編集発行を受け継ぎ、江差地方の歴史、文化風土を主テーマに季刊発行に力を注ぎ、文芸作品にこだわらず、文筆者、読者層を広げ文化活動の継続に力を注いだ。地方の街で同人誌を自力で発刊することは難しい。それも季刊で一度の休刊もなく創刊40年を経過、さらに節目には特集を5回発刊している。ささやかだがあまり例のない業績であろうと自負している。これも江差の歴史文化によるものだと思っている。

江差の文化風土を自分なりに理解したいと夢を追い、発掘あるいは取材創作を試み、北海道新聞社出版と自費出版、共著など10冊余を著作することができた。

館長の職を終えてから、追分にかかわることを模索し、江差の文化発信を目標に追分録音制作会社を創業、郷土芸能や全国大会優勝者の収録から全国大会出場のライブ収録の即売を手掛け、江差の芸能文化を商品化することができた。録音制作事業は利益経営までには至らなかったが、全国各地から予想外の反響がよせられ文化発信の達成感を実感している。



このたび江差の歴史文化に手探りでかかわった私の活動に目を留めていただき、神山茂賞の荣誉ある受賞を与えていただき、感動いたしております。この評価も私の事績というより江差の文化が力づけてくれたものと感じております。

函館文化会が広く地域文化の顕彰に意を尽くされることに敬意を表し、心強い励ましをいただき感謝申し上げます。関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

平成27年 函館文化会講演会

『開港地函館に見る芸術・文化』を演題に開催されました

函館文化会では、平成27年10月17日(土)函館市中央図書館視聴覚ホールにおいて「函館文化会講演会」を開催いたしました。本講演会は、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年行われているもので、この度は北海道立函館美術館主任学芸員 大下 智一氏を招き「開港地函館に見る芸術・文化 ～かつての函館はアートの最先端だった～」と題し行われました。

大下氏は講演の冒頭で、明治時代から描かれた複数の画家の函館の風景画をスライドで紹介しながら、「函館は当時から絵になる街」と解説。その原点が、ペリー提督の渡来により日本最初の貿易港として栄えた函館の文化的土壌の豊かさがあったとも話しておりました。

また、幕末の函館に伝わった写真術、洋画に始まり、ハリストス正教会とイコン、明治・大正期の建築物など国際色豊かだった幕末から戦前期にかけての函館の芸術・文化について、写真家田本研三やイコン画家山下りん、文学・美術のジャンルでそれぞれ才能を発揮した長谷川4兄弟などを次々と取りあげながら紹介するなど、来場された約100人の市民の方々にとって意義深い講演会となりました。

今回の大下氏の講演内容については、要約されたものになりますが本会報に掲載させていただきました。今一度講演会当時を思い起こし、ご一読いただければと存じます。



平成27年講演会・講演録 (平成27年10月17日)

開港地函館に見る芸術・文化 ～かつての函館はアートの最先端だった～

北海道立函館美術館 主任学芸員 大下 智一

今日のテーマは「開港地函館に見る芸術・文化 ～かつての函館はアートの最先端だった～」です。アートというと、人によっては「よくわからない」と言う方もいらっしゃると思いますが、そうした時代の話からアートというものがすごく力になるものだということを、少しでも感じていただけたらと思いながらテーマとさせていただきます。

箱館が開港されたおり、箱館奉行は、窯業を起こして陶磁器を売れば、それが名産品となると考えました。それで美濃から陶芸家を呼んできて作らせたのが箱館焼、いわゆる白磁に絵付けが付いた焼き物です。箱館が開港地だと

うことを意識して、例えば異人の姿を描くとか、洋酒のグラスみたいな器(図1)を作る、または箱館八景という新たな名所をつくって描くとか、異国情緒を売りにした焼き



(図1)《箱館焼 染付 蝦夷人唐子文様碗》1859(安政6) 市立函館博物館蔵

物を作りました。こういった発想というのは今でも同じです。今でも函館は異国情緒を売りにしているところはあります。それは函館だけでなく、神戸も横浜もそうですし、アートを使って街おこしをしていく戦略というのは、今でもあると思うのです。

じゃあこの箱館焼はどうなったのかといいますと、結局うまくいかなかった。なぜうまくいかなかったのか言うともすごくコストがかかったからです。函館の土はあまり焼き物に向いていないので、美濃から土を持ってきます。それだけで、すごい手間とお金がかかってしまう。また冬になると土が凍ってしまい、だめになってしまうこともある。さらに、焼き物を焼くための窯を使う薪も大量に必要になるので、さらにコストが必要になる。だんだんコストに押されていって、松倉川あたりの土を使おうとしたのですけど、それでもうまくいかない。結果としてはうまくいきませんでした。

幕末の箱館に、写真という新たな技術が入ってきました。まず、1854年に入港したペリー艦隊の写真師エリファレット・ブラウンJr.によって撮影が行われます。現在、その時撮られた写真の内3枚は日本に残っています。その3枚とも松前藩からホストとしてやってきた侍とその従者たちを撮ったものです。これらの写真は、銀板写真という技法で撮られています。銀の板を磨いてそこに薬品を塗布して写すものです。

このペリー艦隊による写真撮影を見ていた人物が、後に日本を代表する写真師、画家となった横山松三郎です。横山は、函館においての写真撮影を目の当たりにし、その後ロシア領事館にいた画家の助手になり西洋的な絵画を見て、写実的な描き方を学びます。彼は絵画と写真を区別せずに、リアルにものを再現する方法として学びました。もちろん彼自身、絵というものは単なる技術じゃなくてアートとしての部分を認めています。ただ当時の一般的なとらえられ方としては、その二つには差がなかったと言う部分もあります。また、横山は写真と油絵を両方研究した結果、写真と油絵の長所を一つにした「写真油絵」という技術を開発しています。

木津幸吉は1864年ないし66年に、函館で営業写真師として活動を始めた人です。木津はロシア領事のゴシュケビッチから写真を学んでいます。元々は洋服の仕立屋さんだっ

たのですが、ロシア領事館に洋服を作ってくれと頼まれて出入りしている内に、写真を見て興味を持って覚えたというわけです。

田本研造も、やはり幕末の函館において、ロシア経由で写真を学んでいます。生まれは紀州ですが、幕末に長崎を経由して函館にやってきます。当初は医師を目指していましたが、足を壊疽で失い、そのとき手術をしたロシアの外科医師から写真を学びました。幕末には、有名な土方歳三の写真なども撮ったと言われています。明治に入ると、開拓使の依頼により、札幌の開拓や、函館と札幌を結ぶ道路工事の様子などを撮っています。この後も田本は函館の街の成長の跡を撮っています。例えば、当時の函館の産業の一つとして、開拓使が東京に輸出していた氷を五稜郭で採る様子(図2)や、函館公園の開園式なども撮影しています。さらに、コレラ対策として作られた、日本で二番目の水道敷設工事の様子や、大きい船を函館に寄せるため、台場を崩して港を深く掘る様子を撮った写真など、大がかりな工事の記録も撮影しています。こうした田本の写真は、ドキュメント写真の嚆矢として現在でも高い評価を得ています。



(図2) 田本研造《五稜郭伐氷》1877(明治10) 函館市中央図書館蔵

ロシア経由で函館に入ってきたものとして、ハリストス正教会があります。函館のハリストス正教会は、今でも函館のランドマークとして親しまれています。その正教会には欠かすことが出来ない、祈りのためのイコンを描いた日本人がいました。

山下りんは、1876年に開校した日本で最初の美術学校、工部美術学校でイタリア人画家のフォンタネージに学びます。そこで、同級生のすすめで正教の信者となり、函館から東京に移っていたニコライによって、イコンを学ぶためロシアに派遣されます。

本来のイコンは、ビザンチン美術を受け継いでいるので写実的要素がきわめて少ない、いわゆる西洋画とは描き方

がまったく違います。ところが、山下が留学した頃は、西洋風の写実的なアイコンが登場し、さらにそうしたアイコンに反対して伝統に戻るべきだという動きが起こっておりました。そこで、山下は大混乱します。自分はフォンタネージに学んだ西洋美術を生かし、エルミタージュ美術館の作品を見て、そうしたものを描きたいと思っておりましたが、でも、修道院の人たちは逆に伝統に戻るべきだという。そこで様々な騒動にもまれながら二年で体調を崩して帰ってきてしまいます。

その後、山下は、日本各地に作られる正教会のために多くのアイコンを描きます。山下が残したアイコンは、いわゆる伝統的なロシアアイコンではありません。ただロシアの混乱した時代を日本において伝える、きわめて珍しいタイプのアイコンではあるわけです。ちなみに、皇太子であったニコライ二世が来日した際、山下が描いたアイコンが誕生日のプレゼントとして渡され、それは現在エルミタージュ美術館に収蔵されています。もちろん函館の教会にも、十二大祭図など山下が描いたアイコン（図3）が残されています。



（図3）山下りん《至聖生神女之福音》大正初期 函館ハリストス正教会蔵

函館の大きなアイコンは、山下が描いたものではなく、ニコライがロシアで描かせたものを輸入しています。つまり、函館のアイコン全体の雰囲気はニコライの好みが集約されたもので、西洋画のイメージが強く残っています。例えば、イコノスタスの真ん中最上部の《機密の晩餐》、つまり《最後の晩餐》の図柄が、レオナルド・ダ・ビンチのそれと同じものなのです。祈りのためのアイコンながら、信者の方々はいわば本格的な油絵を間近で目にするのが多かった。信者でない方でも大正期にロシア語の教室なんかも教会でやっていて、意外と間近に見ることがあったのかもしれませんが。こういったものが大正時代の函館にはあったのです。

重要文化財に指定されているハリストス正教会、元町カトリック教会などをはじめ、明治・大正期に多く作られた建築物が、函館の観光資源の大きなものになっています。他にも、重要文化財の函館区公会堂、遺愛女子学院宣教師館・ホワイトハウス。あと、鉄筋コンクリートの函館図書館書庫。これは、東京駅を設計した辰野金吾の事務所が設計した建物です。今井百貨店の函館支店も早い時期の鉄筋コンクリートの建物です。現在は街作りセンターとして使われています。こういったおしゃれな意匠の鉄筋コンクリートの建物、百貨店や銀行の建物が、未広町界限には多く建てられています。ほんとに賑やかな街だったと思います。

その頃の街並みを、熊谷孝太郎というアマチュア写真家が撮った写真が残っています。例えば、おそらく亡命ロシア人の方が、帽子をかぶってびしっと背広を着て、しかも花束持って電車を背に街を歩いているという、カッコいい写真（図4）があります。外国人が闊歩するハイカラな街というイメージであると思います。



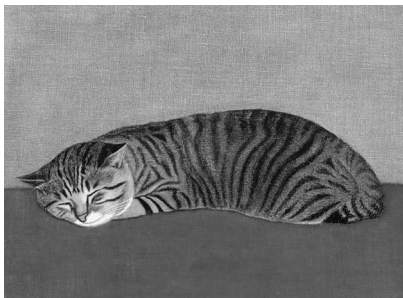
（図4）熊谷孝太郎《恵比須町電停前》大正後期 はこだてフォトアーカイブス/原板熊谷孝泰氏蔵

こういったハイカラな街並みで育った中から、美術や文学の世界で活躍する人たちが出ています。その中で、今日は長谷川四兄弟という方々をご紹介しますと思います。長谷川四兄弟は、函館新聞という新聞社の社長を務めたお父さんの、一つは外国語を覚えること、もう一つは一角の人物を目指すこと、という教育方針の下、函館のコスモポリタンな雰囲気の中で育ち、それぞれ文学に美術において活躍を見せていきます。

まず長男、海太郎。函館中学、今の中部高校を退学になって、アメリカ放浪の旅に出るのですが、日本に帰ってから、そうした経験を生かして小説家としてデビューします。彼は三つのペンネームを使い分けて書いていました。一つは

谷譲次という名前で書いています。谷譲次で書いていた本というのがアメリカでの経験を生かしたもので、アメリカのスラングを使ったり独特の節回しで書かれています。二つ目は牧逸馬と言うペンネームで書かれたものです。これはヨーロッパの怪奇小説の翻訳や探偵物などを書いています。そして最後に林不忘という名前で時代小説を多く書いています。中でも有名なのが丹下左膳です。ただ、活躍のさなか、35歳の若さでなくなっています。

次男の湊二郎は絵画と文学、両方の世界で才能を発揮しました。19歳のときに函館で描かれたと思われる作品が残されていますが、未来派とかキュビズムといった20世紀前半の前衛美術の影響が見て取れます。ものすごく早熟な少年だったのです。湊二郎はその後東京に出て、地味井平造というペンネームで探偵小説を発表します。稲垣足穂と並び称されるなど、高く評価されていますが、ほどなく本格的に絵の方に進みます。その画風は、時が止まったような、不思議な魅力があります。湊二郎の作品で一番有名なのは、《猫》と言う作品（図5）です。湊二郎はものすごく絵を描くのが遅い上に、実際に見えるものでなければ描かないといていた。この絵を頼んだ画商が催促すると、猫がこのポーズを取るのには年二回だけだからそのときしか描けない、と言い張る。そうこうするうちに猫が死んでしまいます。それでもまだ絵は渡してくれない。画商がその理由を聞くと、「髭が片方しか描いていないから完成じゃない。猫もいないからもう描けないんだ」と答えたという伝説のような話が残っています。



(図5) 田本研造《五稜郭伐氷》1877(明治10) 函館市中央図書館蔵

三男の濬はロシア語を得意とした人で、「偉大なる王」を翻訳した人として知られています。その後は、函館出身の神彰と一緒にコサックの合唱団を呼んだりしています。そうした活動もしていますが、本人としては最後まで詩人として生きた人でもあります。

四男は四郎と言い、小説家、そして詩人、そして翻訳家

と様々なジャンルで活躍した人です。戦後、「第三の新人」として注目され、芥川賞候補の作家だった。文壇の中でも非常に活動的で、評価も高い作家でした。シベリア抑留の経験を生かした「シベリア物語」や「鶴」などの作品が戦後すぐの頃の作品で、割と重たい作風だったのですが、晩年は不思議な軽みを帯びた、シュールレアリズムっぽい特徴を持った作風になってきます。そういった詩も多く残っていて今読んで面白いなぁと思います。さらに、彼は独特な線描を用いた不思議な感覚の絵を描き、自身の本の表紙絵や挿絵を手がけています。

ところで、長谷川四兄弟と同じ世代の函館出身で、亀井勝一郎というこちらにも非常に有名な文学者がおります。亀井は彼らの作品について、「外国の汽船が往来し、アメリカ人やフランス人やイギリス人や中国人の雑居していたこの街の気分」が反映していると評しています。外国人たちが雑居していたコスモポリタンな雰囲気というのが、まさにこの長谷川四兄弟の芸術の素養を支えたものであったと考えますし、それこそが開港地函館に根付いた文化芸術から生み出されたものだったと言えると思います。

長くお話してきたわけですが、かつての函館が非常に豊かな文化を育てていたことを、改めて見ていただければと思います。

大 下 智 一 氏 略 歴

昭和42年(1967) 函館市にて出生
 平成3年(1991) 北海道大学文学部哲学科を卒業
 同 年 北海道立函館美術館学芸員として採用
 平成11年(1999) 北海道立近代美術館学芸員として勤務
 平成16年(2004) 北海道立函館美術館主任学芸員として勤務
 平成28年(2016) 北海道立近代美術館主任学芸員として勤務
 (著 書)

- ・『山下りん 明治を生きたアイコン画家』(2004年 北海道新聞社)
- ・「田本研造—その生涯と業績」(『photographers' gallery press no.8』2009年 photographers' gallery)
- ・「内なるリアリズム—長谷川湊二郎の画業と生涯」(『長谷川湊二郎画文集 静かな奇譚』2010年 求龍堂)
- ・「北海道開拓写真」(『レンズが撮らえた 日本人カメラマンの見た幕末明治』2015年 山川出版社)
- ・「絵と詩 長谷川兄弟による越境の試み」(『画家の詩、詩人の絵』2015年 青幻舎) など執筆。

市 民 公 開 講 座 を 開 講

～ 第 1 回 は “ 函 館 弁 ” を 学 ぶ ～

函館文化会では、郷土の歴史・文化などを学び、探究しながら、受け継がれてきた「郷土の文化」を後世に継承することを目的に今年度から新たに「市民公開講座」を開講することといたしました。

その第1回目の「市民公開講座」を函館大学の講義室をお借りして、函館大学専任講師 角田美知江先生に「“函館弁”の持つ可能性について」と題して開講。事前の申込を受けなかったこともあり何人受講されるか危惧しておりましたが、開会前には講義室が一杯となり準備した資料に不足をきたし慌てて追加でコピーする始末でご迷惑をかけてしまいました。しかし、講座を受講した皆さんは講師の話に傾き、また、時折笑い声も聞かれるなど好評を博しておりました。

なお、講座の内容について、角田先生に概要をまとめていただきましたのでご紹介します。

“ 函 館 弁 ” の 持 つ 可 能 性 に つ い て



函館大学 専任講師 角 田 美知江

意思疎通が成されても同じ言葉とは思えない程に変化していくのです。これが方言の形成です。このまま、隔たりが開いていき、意思疎通も出来ず、共通の文法も見いだせなくなると、両者は異なる言語と見なされるようになっていきます。

日本でいう「方言」は、「めんこい」「おもろい」などのような標準語・共通語とは異なる各地方独特の語彙や言い回し、あるいはアクセントや発音の違い（いわゆる「なまり」）を指す場合が多いようです。

言語学では、アクセント・音韻・文法など全てを含め、その地域社会の言語体系全体を指して方言と呼ぶのが一般的です。

言語学的に言うと、訛りは方言を特徴づける要素のひとつであり、「訛り」を「方言」と言っても間違いではないようですが、それ以外の方言の要素を「訛り」と言うとは間違とされます。訛りは、標準語に比べて、地域特有の発音をさしているのです。

例えば、異なる言い回しは、訛りではなく方言とされ、北海道の「なまら（非常に）」、沖縄の「めんそーれー（いらっしゃい）」などは、特定の地域で使用される独特の言い回しなので、「訛り」とは言わず「方言」と呼ぶようです。

1. 方言について

① 方言とは

方言とは、ある言語の内、標準の言葉に対して、地域や社会区分により使われる語彙や文法に違いが見られる言葉のことであるといわれています。

そもそも言語は、その文化や風土に合わせて変化することが多いとされ、標準とされる言語地域に対し、環境の違う地方では、独自の表現が用いられることが考えられます。その一方で、標準とされる言語地域では、社会の発展によって新しい文物が取り入れられ、それによって新たな語彙や表現が獲得されていくに従い、古い言葉が失われているとされています。しかしながら、地方では、古い語彙や表現が残ることもあり、また、発音や文法も異なっていきます。

この中央と地方の差が長年にわたって蓄積していくと、

② 方言と標準語の関係

実は、日本語に標準語という概念が成立するのは明治以降なのです。それは日本を近代的な国民国家として確立したいとする体制側の強固な意志に基づいてなされました。明治20年代以降、義務教育のなかで、この標準的な日本語が生徒に教え込まれ、国民は共通の言語を話すという点でも、均一な民族なのだという確信を強める必要があったからだといわれています。

標準語という概念には二重の意味合いがありました。ひとつは話し言葉としての標準語のあり方であり、もうひとつは書き言葉と話し言葉を通じての標準的な文体がどのようなべきかという点でした。前者は、日本の近代化にとって欠かせない問題と意識され、学校教育や社会教育の重要な課題となりました。後者は文学者たちを中心に言文一致運動として展開されていったのです。

話し言葉についていえば、徳川時代以前には国全体を通じての共通の言語、つまり今日いう標準語のようなものはありませんでした。もちろんこの地方でも日本語を話していたはずですから、共通の枠組みはあるはずですが、発話の実際においては地域ごとに著しい相違がありました。そのなかで話し手の人口も多く、有力だったのは、京都や大阪を中心にした関西の言葉と、江戸の言葉でした。江戸の言葉でも、庶民で使われたものとは異なり、武家社会を中心に成立していたものが、今日の標準語の基本となっていたのです。

さらに、標準語という概念が成立すると、方言というものに価値の転換が起きます。方言という言葉自体、徳川時代以前には基本的になかったはずなのですが、標準語という概念が成立すると同時に、その対概念として成立させられ、負のイメージとして見られる要因を作っていたと推測されます。

話は戻りますが、いったん標準語が確立すると、それは日本国民全体が話せなければならない標準の言葉であり、方言は無教養な土人が使う野卑な言葉だという考えが生まれていきました。先ほどお話しした負のイメージの誕生です。こうして言語の間に、新しい差別の構造が出来上がっていったのです。

③ 方言についての学術的なお話 ～柳田國男の方言圏論

方言がどのように伝わっていったかを知る手がかりとして、柳田國男が自著『蝸牛考』（1930年）において提唱した「方言集圏論」があります。これは、方言の語や音などの要素が文化的中心地から同心円状に分布する場合、外側にあるより古い形から内側にあるより新しい形へ順次変化

したと推定するもので、見方を変えると、一つの形は同心円の中心地から周辺に向かって伝播したとする理論です。

2. 北海道弁≠函館弁？

① 方言区画論

函館弁の歴史をお話しする前に、方言区画論について説明いたします。

方言区画論は、方言区画を扱う方言学の一分野です。1927年（昭和2）東条操が唱えたものが最初の理論です。東条によそうした和人の定着が早かった地域では、東北方言（特に北奥羽方言）的な色彩が濃い海岸部方言（浜言葉）が成立しました。北前船で北陸地方や上方と結ばれた歴史も持ったため、語彙には北陸方言や近畿方言の影響もあるようです。日本全域は内地方言と沖縄方言に分けられ、内地方言はさらに東部方言・西部方言・九州方言に分けられ、東部方言はさらに北海道方言・東北方言・関東方言に分けられるとしています。

東条以降様々な研究が行われてきましたが、現在も絶対的な区分案は存在していません。方言区画を設定する際はどの要素を基準にするかで全く異なってくるため、音韻、アクセント、文法など、基準を統一する必要があるからなのです。



② 函館弁の歴史 ～北海道弁との関係

蝦夷地（北州）への和人の進出は古く飛鳥時代の阿倍比羅夫の蝦夷征討・肅慎討伐の頃まで遡ります。平安時代末期頃になると東北地方から渡島半島南部に和人が定住していたとの記録がみられ、鎌倉時代・室町時代の蝦夷沙汰職・蝦夷管領の時代を経て、江戸時代までには渡島半島南部一帯は和人地化、北海道沿岸部各地に和人の居住が広がっていきました。

北海道方言のルーツの1つは函館を中心とする海岸方言

とされています。当時経済・文化の中心だった函館の言葉は北海道の共通語のように全道に広がりました。

他府県の方言が北海道に入ってきたのはそれより遅れて明治に入ってからで、開拓のため全国から大勢の人々が、内陸地方に移住するようになってからのことです。それぞれの出身地の方言の特徴を残しながら、既存の海岸方言と交じり合い、さらに共通語も加わって北海道内陸方言が形成されていったとされています。

歴史的背景から、北海道方言は、渡島半島および北海道沿岸部各地の海岸部方言とそれ以外の内陸部方言に分かれるそうです。海岸部方言の中でも漁村で話される言葉は浜言葉と呼ばれ、共通語に近い内陸部方言に対して、海岸部方言と呼ばれています。また北海道自体が広いため、海岸部方言や内陸部方言の内部でも地域や人によって微妙に異なっているようです。

北海道方言全体の母体とも、土台ともいわれる「海岸部方言」。これをさらに「道南方言」と「松前方言」に分けることがあるようです（北海道ホームページより）。そして、その発音は、濁音が多く、鼻にかかる音があること、シとスの音があいまいで、詰まる音や伸ばす音がはっきり聞こえないなど共通するところもあるそうです。

「道南方言」とは、津軽海峡の対岸、青森県の下北半島の方言の要素が濃厚であり、北海道方言の中でも最も有力な方言のようです。その中核は下（しも）海岸のことばであり、代表するものに榎法華村（とどほっけむら）のことばがあります。なお、下海岸とは松前を上とし、その反対に位置する函館から恵山（えさん）岬にかけての海岸を下と言い習わしたものであるといわれています。

「松前方言」は青森県の津軽半島の方言の要素が多いようです。この伝統的な方言を色濃く残す地域には松前町白神（しらかみ）があげられます。この地域は明治・大正時代を通じて通婚圏・経済圏が対岸の津軽半島に及んでおり、文化、生活面での影響も大きかったとされています。また、松前藩時代から城下町への海産物・鮮魚の供給地であったため、京都方面のことばを使う商人が多く出入りしたことから、ことばもその影響を受けている可能性があります。結果として、北海道弁≠函館弁というわけではなく、函館弁が進化して北海道弁になったといえるのではないのでしょうか。

3. 方言の魅力とマーケティング

～ネガティブイメージからの脱却

① 方言は地方の財産

これまで方言は「共通語よりも劣ったもの」であり、使うことは恥ずかしいことだという認識が持たれていました。

そのため、方言は、地方出身者のコンプレックスのようにネガティブに扱われていました。しかし近年、日本文化の魅力を見直ししようとする国の動きの中で方言もその価値を見直され、その認識は教育やマスコミの手も加わって徐々に変化しています。

方言は共通語や文字では表現できない独特な雰囲気を持っています。その土地の人々の生活の中から自然と発せられるものであり、時・場所・人間関係・性別・年齢によって違うこともあります。すなわち気取りのない素朴さが方言の魅力なのです。

山形新幹線には、山形弁丸出しでワゴンを引くカリスマ販売員さんがいます。彼女は、「方言は決して恥じることのない立派な個性」と考え、方言をためらわずに使ったところ、車内で声をかけられる率がグンと上がり、売上も通常の2倍になったとか…。方言を使っていると、お客さんと対話が生まれやすく、サービスの武器ともいえるのです。

② 方言で商品開発

方言で町おこし

「西諸弁標準語化計画」

宮崎県小林市は、宮崎県の南西部に位置し、人口およそ5万人の小さな市です。主要産業は農業。人口減少に歯止めがかかりません。

そこで、「地域の魅力」をもう一度見つめ直し（発掘）、保存と活用地域の魅力（風景、風土、歴史、生活習慣、住民、方言等）を発信することで、市民の郷土に対する誇りや愛着の醸成とともに、都市住民との交流につなげ、交流人口の拡大と定住人口の増加を目的とし、小林市の魅力を様々な視点から見つめ直し、磨き、新たな形のものとして発信しようと様々なプロジェクトを立ち上げています。その1つが、「西諸弁標準語化計画」です。「西諸弁標準語化計画」は、「てなんど小林プロジェクト」との1つで、「てなんど」とは、小林市を含む西諸地域の言葉（西諸弁）で「一緒に」という意味の「てなむ」と、地域資源のブランド化をしたいという思いの「ブランド」をつなぎ合わせた造語です。

「ダイドードリンコ」の方言を話す自動販売機。

この自動販売機は、金銭投入時や商品選択ボタンを押した時に流れる3種類のフレーズを、各地域で親しまれている方言で、おしゃべりするというものです。さらに、気温や時間帯などに応じてタイムリーな商品を表示する機能を持っています。購入客が自販機の前に立つと人感センサーが購入者の年齢層と性別を判断し、属性・時間帯・気温な

どを加味しておすすめを表示する仕組みだそうです。一方向だった自販機が、双方向コミュニケーションツールへと変わってきている上に、方言というサービスツールを使って、おもてなしをしようという新しい試みが始まっています。

③ 方言で売る ～方言が売れる商品に

思い出してください。2007年1月に行われた宮崎県知事選挙。汚職による現職知事の逮捕に伴い行われたこの選挙は、当時お笑い芸人であった東国原英夫氏が当選。「宮崎をどげんかせんないかん」というフレーズは当時流行語大賞にも選ばれました。宮崎県民が彼を知事に選んだ理由は色々あると思います。

宮崎再建の為の具体的なマニフェスト、無所属であるがゆえの「しがらみのなさ」、タレントの選挙応援を一切受けなかったことによる「脱タレント」の印象。それに加え、「宮崎弁を使った遊説、演説」も県民の方々に好印象を与えたのかもしれない。

今、空前の方言がブームとなっています。2010年に東名阪ネットで作られたバラエティ番組「方言彼女」。

「方言を話す女の子はカワイイ！」をコンセプトに作られており、地方出身の女性タレントたちが地元の方言を使ってイメージムービーやコントなどを繰り広げていました。放送開始から、現在も高い人気を誇っています。また、ドラマCD「方言恋愛」。声だけで繰り広げられるラジオドラマであり、1話30分の短編です。

第1話「愛知県」、第2話「高知県」……という形で1話毎に舞台が変わっており、聞こえてくるのは全てその土地の方言です。

方言がブームとなった理由として、方言には飾らない素朴さと人間らしい温かみがあるという事があげられますが、言語文化としての方言として考えるとこのブームについては考えることも多々あります。

④ 函館弁とマーケティング

函館にはたくさんの観光資源があります。方言もその1つと考えます。

函館弁は、先にお話しした通り、北海道の中でも独自のものを持っています。

方言を使用することで、地元の特化したイメージを提供することが可能になります。お客様と言っても、住んでいる場所だけでなく、性別や状況などの様々な条件によって、最適なコミュニケーションが異なります。より地域に親しみを感じてもらうためには、お客様の興味を最大限に喚起できるような伝え方で訴求することが重要になってきます。

函館弁を観光資源として生かすことによって、もっと函館を知りたいという方も増えていくのではないのでしょうか？もちろん私もその1人です。



“函館弁”が飛び交い、賑わいを見せる函館朝市

余談

「吉幾三マーケティング」なるものが存在しているようです。

青森県を代表する演歌歌手といえば吉幾三でしょう。彼のヒット曲は数多くありますが、代表的な曲は「雪国」「酒よ」などでしょうか？これらの曲は全国でもカラオケでたくさんの方々に歌われています。

ところがよく聞いてみると、どの曲も歌詞の内容は青森県や東北地方について歌われているにもかかわらず、津軽弁ではなく標準語が使われています。他の多くのヒット曲もそうです。

一方で、吉幾三がデビューした頃、彼の名前を世に知らしめたのは「俺はぜったい！プレスリー」「おら東京さ行ぐだ」などの曲。これらの曲は堂々と方言で歌われ、ダジャレやおふざけも散りばめられています。このやり方が彼の芸能界での全国展開の大きなきっかけとなったのは間違いありません。

地域発の特産品の開発においても、販売先やそれぞれの商品の成長ステージごとにおいて、方言の面白さや上手な活用方法があるのではないのでしょうか？

次回の市民公開講座は3月に予定

第2回市民公開講座は、「食」をテーマに3月中旬に開講を予定しております。

開講日時、講座の内容、講師等決定次第改めて会員皆様にお知らせいたします。ご期待下さい。

函館文化会「卓話」

～総会終了後に開催しています～

函館文化会では、毎年開催される総会で提案された議案等の審議終了後、より会員との絆を深めようと「卓話」の時間を設けております。「卓話」は堅苦しい講義や講演にというイメージではなく、和らいだ雰囲気の中にも卓見・卓説・高遠な話を聴こうというのが趣旨で、平成20年度から始められたものです。

今年は2月の臨時総会と5月の定時総会において次の「卓話」を行いました。それぞれ興味深い内容でしたが、改めて講師の方々にお話いただいたポイントを纏めていただきましたので、ご紹介します。

第12回卓話 悪戦苦闘で完歩した“江戸五街道” 講師：中尾仁彦氏
第13回卓話 江差の風土と文化 講師：松村隆氏

第12回卓話（平成28年2月23日）

悪戦苦闘で完歩した“江戸五街道”



ただいまご紹介いただきました中尾ですよろしくお願ひ申し上げます。

平成26年には神山茂奨励賞をいただきまして厚くお礼申し上げます。本日は気軽に話して欲しいということなので、私の体験談と言うことで「悪戦苦闘で歩いた旧江戸五街道」と題しての話を1時間ほどさせていただきたいと思ひます。

五街道のスタート地点は江戸、東京の日本橋です。基本的な街道として海側の東海道、山の方の中山道、どちらも日本橋から京都三条大橋まででこれがメインです。その他に日光街道、奥州街道、それから甲府を通して下諏訪で中山道と合流する甲州街道、この五つを合わせて江戸幕府直

箱館歴史散歩の会 主宰 中尾仁彦

轄の五街道と言ひます。

私は平成17年9月末、63歳で仕事を辞めるといふ決断をいたしました。辞めてから何をしたらいいだろうかと思ひていましたが、昔から歩くことが好きだったので。小学生の夏休み毎にニチロ（日魯）ビル内のニュース専門の映画館まで、人見町から往復10km歩いて映画を見に行くのが習慣となっていました。30代には「函館歩け歩けの会」に入会しまして全国の歩く大会に出たりしました。56歳になった時に、オランダの通称「歩けオリンピック」といふ世界中から1日4万人も参加し、4日間連続で毎日50キロ歩く大会に出ました。何のこと無いのです、たった1枚の完歩賞もらうだけにお金を使っていたのです。それほど歩くことが好きでした。

63歳の退職する少し前から、東海道を歩きたいといふ強い願望を持ちます。第2の人生に向けてどれだけ自分に体力が、そして精神力があるのかのパロメーターは、おそらく東海道を完歩できたら分かると思ひていましたから。

街道の歩き方は中継ぎして行く方法もありますが、私は連続休みなしで行くといふ計画を立てたわけですから。その立て方が後で失敗に繋がるのですけど…。



京都の三條大橋にゴールしての記念撮影

起きて6時にスタートします。ビジネスホテルに泊まっている時は前の晩にパンでもおにぎりでも買い置き、食べてスタートです。旅館とか民宿では朝食が付きますが、朝5時からご飯食べさせてくれとは言えないので前の晩におにぎりを握ってもらいます。

そして黙々と午前中は歩きます。例えば東海道は14日間で計画しましたが先ず半分、すなわち7日間歩いてやっと半分来たかと思うと力がみなぎってきます。まだ1日、まだ3日目かというのはものすごくストレスが溜まるのです。と同時に1日単位で言えば40kmですからまず半分の20km以上歩くのが目標。歩き始めたらひたすら歩きっぱなしです。昼食時間になっても調子良ければ無視、とにかく半分以上歩いてしまえば「あーっ、残りはあと何km」とすごく力が違ってきます。それから途中で興味ある史跡や社寺もありますけど、それが道路沿いでなければ時間ロスに繋がるので見物はしません。ですから歩いている間はとにかく歩くことが最大の目的、よそ見はしないと決めます。

実は私は靴擦れがものすごいんです。なんとか7日間歩き、東海道53次の27番目、街道の丁度真ん中の宿「袋井宿」に着きました。その茶店で東海道を歩いた公認の証明書を出してくれる制度がありまして、「来たよ」と言って判をもらうのですよ。だからその27番目の茶店には必ず立寄らなきゃならないです。

そこで判をもらいながら靴擦れの足の手当てをしています。その番頭さんとの会話。「どこから来たの」「函館から」「どこから歩いてきたの」「日本橋から」「えっ！」という話になりました。中継ぎの人が多いわけですから、「日本橋から歩いてきたの」「今日で?」「1週間」「あっ！」

さらに先ほどの「1日30km、18日を、昔の人に合わせて40km、14日に変更した」という話をした記憶です。靴擦れの手当てに何分か費やした後再び歩き始めました。私は痛いと思いつつも自分では普通通り歩いたつもりだったので、番頭は後ろ姿を見て、大変不安に思ったようです。後日番頭が私とのやり取りを旅人に話したようで、「函館の人は今どこを歩いているものやら?心配だ」と掲載された旅人のブログを帰函してから発見、驚いた次第です。私はかなり痛々しい姿だったのでしょね。

ようやくと宿に着きますと、1番先になんたって風呂に入ります。温めながら徹底して足を揉みます。もう膝から何から1時間くらい時間かけてやらないと疲労につながりますので。風呂から上がると今度は足の手当てです。もう豆だらけで、それを全部消毒した針でつぶして薬を塗り、ガーゼを当てて絆創膏を貼るという状態までにします。今度は洗濯です。洗濯はたいして時間はかかりませんが乾燥機は1~1時間半かかりますからなげておいて食事をします。旅館であればそのまま食べられますが、コンビニとかレストランに行っても食べることもあるわけですね。そして一通り洗濯・乾燥を終えてリュックに全部詰め込み、明朝すぐ背負えるような状態にして寝ます。朝5時に起きますとシーツは真っ赤です。やはり足から血が出た結果なのです。そうすると5時から6時までの1時間でまた足の手入れをしなければなりません。指全部、踵、最後は足の裏の皮が全部べろっとむける状態です。無理して歩き続けているものからついに脛が痛くてどうしようもなくなったのが江戸から41番目の名古屋市内「熱田宿(宮宿)」です。ここで悩みました。1日、2日ここで泊まって痛みが取れるかな…待てよ…と結局1時間以上自問自答しました。止めたくないんです。宿は全部取っていますし、だけどこれ以上無理したら大変だと思って、涙をのんで中部国際空港から飛行機で函館に帰ってきました。

14日で京都に着く予定の10日目でダウンですね。それでも「袋井宿」から3日歩いたことになります。整形外科には「疲労骨折寸前だよ。無理していたら完全に骨折になっていたから判断力は良かったよ」というお褒めはもらったにしても、私にすればビューッと行きたかったわけですからショックだったんですけど…。結果的にはそのあと1か

月後に再挑戦、歩きを止めた名古屋から4日かけて京都まで。結局2回に分かれたが14日間でゴールしたことになります。私は天邪鬼なんですね、途中ダウンし、2回に分けて歩くことになった自分に納得できない。このまま消化不良で歩きを終わたくない。

実は東海道は大阪までの57次が正解でなんです。そのことは前から調べておりましたので、「よし大阪まであと4次歩こう」と決断し2日後に大阪・高麗橋にゴール。人があまり歩かない東海道57次を16日間歩いて、自分なりにうっぶん晴らしをした次第です。

1635年参勤交代制度が始まります。幕府は各藩の財力を落とすために、わざわざお金をかけて江戸まで参勤交代させたわけです。それによって本格的に五街道は発展していきます。

五街道というのは現在の国道です。徳川幕府は情報、物流、通信（飛脚）宿場を直轄管理することにより、各藩の動向を掌握したかったのです。すなわち政治道路であり、軍事道路であったのです。西の方から豊臣の残党が江戸まで攻めてくるのが非常に怖かったのです、特に東海道はそういう意味が強いのです。ですから大井川他2、3の川には、昔から橋がかかっていないのです。橋が無いので一気に江戸まで攻めて来られないようにと。

中山道のお話をします。中山道は今でも山の中なのです。なぜならば鉄道から外れた、高速道路からも外れたのです。ですから大きな宿場町も過疎になっちゃう。ところがそれは歩く人にとっては最高の魅力なのです。昔の面影を非常に残しているからです。中山道は1,300mとか1,100mとかという峠が何か所かあります。簡単に言えば横津連山のようなところを上ったり下りたりしているわけです。距離も東海道より40~50km長いのです。当然歩く日数も多くかかるのです。それなのにけっこう行きは東海道、帰りは中山道というのがあるのは、東海道は橋のない川が大雨で川止めになったら、全部日程が狂うわけです。その点中山道は大きな川は一つありません。計算通り歩けるということが中山道の最大の特徴です。私も30km×18日の日程通りで何のトラブルもなく歩くことが出来ました。

話はちょっと横道にそれますが、先ほど参勤交代のお話をしました。よく時代劇を見ますと「下に下にい」と言っ

ています。幕府と御三家の行列の時には、沿道に人々は伏せなければならないのですが、一般の大名の時は「片寄れ、片寄れ」と言って片側に寄りさえすればいいのです。すべて伏すのは、時代劇の明らかなやり過ぎです。また「下に下にい」とゆっくり歩いていますが、あんな歩き方をするのは決まった場所だけです。

宿場のちょっと手前から体制を整えて歩くのです。宿場を通過したら直ちに体制を解散しスピードを上げて歩き出します。各宿場でも同じことを繰り返すのです。経費を抑えるため、スピードを上げて日程を短縮しなければならないのです。加賀百万石の行列は3千人規模で、15日間も歩きますので、その経費を想像してください。大名によっては、幕府が石高によって決められた公式人員数より少ない人数で出発します。先発隊が先回りをして、各宿場に時給で農夫を手配してもらいます。宿場を通過する際には、公式人員数を満たすため素知らぬ顔でその農夫を加え、何事もなかったように行列が進みます。いかに参勤交代が藩の財政に重い負担となっていたかを端的に表している事柄です。

ご存知かと思いますが、大名行列を横切ってもいいのは産婆さん。今で言う助産師さん、これは緊急に行くということで横切っても斬られることはないのです。

この参勤交代のお蔭で道路整備はもとより、宿、茶屋、お土産屋など宿場が急激に拡大・完備され、弥次喜多道中に見られる「お伊勢参り」など庶民の旅も盛んになって行きます。

平成17年になんとかかんとか東海道を歩きました。1年間はさすがに私ももう嫌だと思って休みましたが、19年になると、また歩きたいなあとということで比較的距離の短い甲州街道、奥州街道、日光街道を3回に分けて歩きます。20年に一番距離があり、かつアップダウンが多くある難関中山道を、最後に歩いたということでした。

私ども人間というのは不便さを知っていますから便利だと言うことは強く感じますよね。しかし便利というものがあるのが当然のこととなってしまったら…そんな疑問を乗せながら、14日間悪戦苦闘で歩いた大阪から時速270キロ、2時間20分で東京まで鉄道を疾走しました。

船旅が一番贅沢な旅だとよく言われていますけど、それよりもっと贅沢な旅「歩きの旅」を成し遂げたということで、たいへん自分の身体に感謝している次第でございます。

ご静聴ありがとうございました。

江差の風土と文化

文芸誌「江さし草」発行人・代表 松村 隆



江差は江戸時代から蝦夷地の終着港として開けた港町である。江戸時代は日本海航路が唯一の交通物流の動脈としての役割を担っていた。その主役は白帆一枚で日本海を往来した北前船である。北前船の膨大な商取引が江差港に繁栄をもたらした。

江差港の黄金時代はおよそ300年にさかのぼる。今はその残影もとどめていないが、北前船が運んだ大阪、京都をはじめ日本海の文化が江差の暮らしに根付いて特有の文化風土を形成している。一見どこにでも見かけられるような寂れた港町だが、町の歴史や文化に目を向けると、人々の暮らしの中に特有の文化が根ざしていることが見えてくる。

江差港の廻船問屋

蝦夷地の和人渡来は、東北地方の豪族による松前藩の蝦夷地支配に始まるが、松前藩は藩の格式となる米が生産されない石高のない異質の大名であった。藩は石高に代わる蝦夷地の生産物、ヒノキ材、ニシン、海産物、アイヌ狩猟の取引で藩を賄う制度を取り入れてゆく。藩政策の取引を担ったのが北前船廻船問屋の御用商人である。

松前藩は松前、江差、箱館の3つの港に1630年（寛政7）沖ノ口番所（奉行）を設け、運上金（藩税）取り立て制度を整えてゆく。

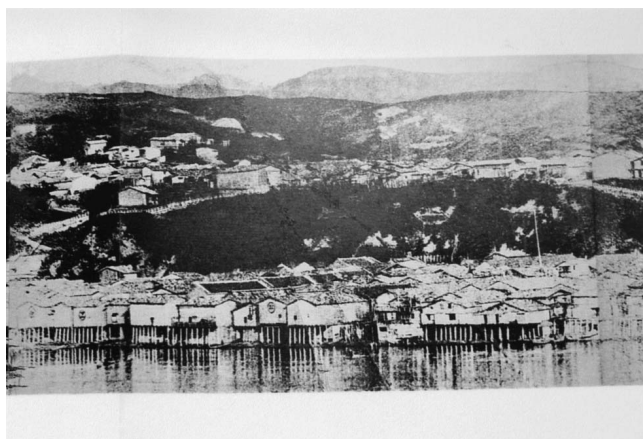
「松前蝦夷記」1716年（享保元年）によれば、松前3港入船江差700艘、松前300艘、箱館200艘と江差港が群を抜いている。松前の城下町に対する江差商港の担う役割を示していると言えよう。

江差港は沖合に鷗島をかかえ、特有の季節風を防ぐ自然

の良港であった。沖ノ口番所の御用商人廻船問屋は出船入船取引一切の業務を取り仕切った。

江差港の問屋株は17店その下に小宿7店が沖ノ口業務を取り仕切る御用商人であった。

北前船は蝦夷地の生産物を積み込んだ下り荷と大阪、瀬戸内海の商品を日本海の各港で商う上り荷の往復航路で取引する商船である。北前船の船頭は航海の技量と商取引の才能を兼ね備えていなければならない。一航海の利益はおよそ千両といわれた。廻船問屋は5艘から大店では10艘の持つ船を運行したというから膨大な取引だったことが分かる。千両は現在の換算でおよそ1億円というから問屋一店で10億、20億の利益を上げていたことになるから、想像を絶するほどだったに違いない。



江差の廻船問屋群 明治時代

港の花街

港には繁栄につれて自然に花街が発生する。

1718年（享保3）「江差町内に飲食店開業し、影の町繁栄す」と古い記録にある。北前船の航海が定着したところである。最初は港から台地へ上がる切石坂周辺とその背後地影の町に料理茶屋や飲食店、芝居小屋などが伸びて盛り場を形成してゆく。その繁栄を目当てに、江差商圏に進出をもくろみ松前商人が藩のお墨付きで茶屋街の造成に乗り出して新開地を開いた。1818年（文政元）上町の畑地5,000坪（16,500㎡）に料理茶屋170棟、酒蔵、芝居小屋を造成、源大夫町と呼んだ。

このように経済力で一挙につくりあげた花街ではあった

が、春ニシン漁に押し寄せる東北地方の雇漁夫ヤン衆や旅人を受け入れるまでには至らなかったようだ。出稼ぎヤン衆たちは前浜に出店を出した仮小屋屋台に殺到し庶民階層の歓楽街になってゆく。この出店は江差特有の浜小屋と呼ばれ、津花、姥神町の前浜に100軒、遊女300人が客をとる歓楽街となった。ニシン漁期の春先から夏まで筵張りの仮小屋で中には2階3階建てでもあったという。旅芸人もおおぜいやってきて夜を徹して太鼓三味線で賑わい、江戸両国の夜見世にも劣らなかったと伝えられている。

一方、切石坂、源大夫町上町界隈の花街は、商店や住宅と混在して風紀治安上問題になって、1843年（天保14）藩命により商店街から隔離して花街が移転される。町はずれの山裾を切り崩して、延長200メートル道幅13メートルの大通りの両側に町割りを区画し、料亭、貸座敷、遊郭、飲食店など40店余を移転終結する。大通りの入り口にはすだれ柳の郭門を据え、通りの奥には芝居小屋を構えた。これが新地花街で今も町の盛り場として伝わる飲食店街である。30年足らずで花街が形成されてゆく経済力に目を見張るものがある。これらの大事業も、藩のお墨付きで、廻船問屋株の商人資本で行われているというから、問屋株仲間が藩政を担っていたと言えよう。

芸文化の定着

花街盛り場の発生にともなって、大阪、京都の上方文化から日本海沿岸の文化が流入し、やがて江差港の芸文化が育まれてゆく。江差の景気を目当てに押し寄せてくる遊芸人や旅回りの舞台芸人たちによってもたらされた芸が、花街の芸人たちに芸文化が定着し、江差の生活風土を織り込んで人々に受け継がれてきたのである。

現在伝承されている伝統芸能は花街の芸文化を背景に定着して受け継がれたように思う。

唄－江差追分、江差三下り、沖揚音頭
踊り－鹿子舞、餅搗きばやし、江差三下り、
江差追分踊り

これらの伝統芸能が、集落や職業など生活に結び付いて受け継がれている。生活に結び付いた伝統文化としては、姥神大神宮渡御祭や北前船航海から発生した鷗島まつりがある。

江差追分が民謡ではじめて北海道無形民俗文化財が指定されたのが1977年（昭和52）で、北海道で指定された7芸能のうち5個が江差の芸能だったことから、人々の暮らしに深く溶け込んでいることが窺える。江差の生活に根差した文化の中でも、全国的に波及する影響力は江差追分が群を抜いている。それだけ江差の風土と暮らしに深く根差して歌い継がれてきたからであろう。

江差追分の生い立ち

追分節は信州小諸馬子唄が源流だと言われている。その歌が越後の港で船歌に変わり船乗りたちによって江差港に伝えられたものだという。旅芸人やごぜたちにも歌われていたようだ。江差ではおよそ1800年ころより歌われていたようで、港の天保沖仲仕荷揚げ唄に「追分はじめは佐之市坊主、芸者のはじめは蔦屋のかめこ」という歌詞がある。

佐之市は南部地方から来た琵琶師で、江差で追分節を歌い始めたと言われているが、実在の記録がない。かめこは「芸名亀吉」という新地の料亭蔦屋の娘である。

江差の盛り場で歌われた追分節が、庶民も歌うようになって北国の厳しい暮らしや風土を歌いこんで歌い継がれてきたのだろう。先人の生き様が追分の唄心を歌い上げたに違いない。

民謡はその地方の民衆に歌い継がれたもので、起源をたどることは難しく追分節が文献に出るのは1843年（天保14）船頭嘉右衛門の「石州温泉津民謡書留」（島根県温泉津町）である。唄好みの船頭が松前唄として追分節歌詞7句を書き留めている。それ以前にも菅江真澄の紀行文（1789年）に「まちは西町盛りの津花沖をながむる山のうえ」という追分らしい唄が記されているが定かでない。

開拓使判官松本十郎、内務卿山田顕義など明治新政府の高官たちが江差に来遊、追分歌詞をたしなんだと伝えられているから、当時から追分節が著名人の関心と呼んでいたことが窺われる。

江差港の繁栄も明治中期になるとニシンも不漁となり、それに追い打ちをかけるように陸路交通からは置き去りにされ、明治末には深刻な不振に落ち込んでしまう。

追分節の復興

江差の浜からニシンも去って、海路交易も陸路に移り深刻な不振を挽回しなければと町の有志が提案したのが追分節による復興であった。各派の追分師匠たちに呼びかけて江差追分として統一し、中央に遠征公演して機運を盛り上げることだった。そのころは江差追分節という名称もなく、それぞれの階層によって各派を結成し競い合っていた。主なものは漁師や庶民の浜小屋節、花街の新地節、艶節旦那節ともいう、職人馬方衆の詰木石節の3派であった。

1909年（明治42）師匠たちが歌い方を「七声七節二声あげ」に決め、東京、大阪札幌など中央に進出して遠征公演を展開するのである。これが「正調江差追分」である。

中央の遠征公演はいずれも名声をあげ江差追分が全国に普及してゆく。歌い手の師匠たちは町の期待を担って、追分に歌いこまれた先人の唄心の真髄を磨いて遠征に臨んだに違いない。先人の生き様の唄が人々の心をとらえる唄に

磨かれたのだろう。歌い手の代表として新地節の平野源三郎、高野小次郎、浜小屋節の村田弥六、詰木石節の越中谷四三郎などが名を残している。各派の師匠たちもそれぞれ芸者や見番師匠たちから唄を受け継いでいるから花街で歌われていたものだったのである。

中央進出が契機となって明治の末から大正期は江差追分が復興し、レコードの普及など音楽の商品流通も加わって、正調追分本唄に前唄、後唄の3部構成も定着していった。江差追分の普及によって各地に民謡歌手の名手が輩出し、レコード会社が企業歌手を売り出したことも普及を加速した。



第50回記念江差追分全国大会
(平成24年9月23日 江差文化会館)

戦後の追分

昭和年代に入ると新たな歌い手の台頭で各派の競い合いが激しく、再編した組織の存続が危ぶまれる事態もあって、1934年（昭和10）江差町長に追分会長を併任して結束することになる。町のひとたちは「追分の江差です」と代名詞にするほど誇りにしたが、町民意識を背景に地域文化に位置付ける組織づくりだったろう。

やがて戦時一辺倒の時代になり、追分も息をひそめ停滞せざるを得なくなったが、前線基地から出撃する特攻学徒の江差追分が、ラジオで全国放送され反響を呼んだことが伝えられている。小樽高商の出陣学徒牧野顕吉さんがフィリピン基地から出撃の前夜、心酔する江差追分を故郷の家族に送ったのである。

♪けむるなぎさに日はたそがれて 沖に江差の灯がともる

死を覚悟の心境でうたう追分に秘められている不思議な力を思う。

そして敗戦、まだ社会混乱に低迷しているなかで、江差では師匠たちが追分教授を立ち上げ、成人学校では追分教室、高校では追分部を発足、追分に復活をかける機運が高まっていく。追分は不思議な唄だ。世の中が不振に落ち込

んだとき、志気の支えにしようとする不思議な力を秘めている。

そして1963年（昭和38）北国の小さな町から「江差追分全国大会」を立ち上げたのである。民謡界でも前例のない地方からの発足は、町を挙げて不振挽回に全国公演を成功させたという意識があったからであろう。

本場江差で発足した全国大会は、毎年回を重ねる毎に、全国から出場者が殺到する飛躍的な発展を遂げていった。会場の聴衆が、歌い手一人一人の唄を聞き分け拍手を送り、わずかのミスにはどよめきの声援で一体感を盛り上げる。「本場の舞台はすごい」と全国からの来場が後を絶たなかった。

追分を地域文化として町長を会長に据えた組織が今に引き継がれ、偏向を排除した方針が会員の参加を促進、組織の躍進を可能にしたといえるだろう。

全国大会の推移

大会回数	出場人数	大会日数	備考
1～13回	80～150人	1日	
14～32回	200～320人	2日	
33回～	350人	3日	少年大会70人増

第33回大会以降は出場人数を350人に固定し3日間で大会運営する方針として、54年を経過した。支部組織160支部会員も4,500人を超えるほどに成長を続ける。しかし半世紀を超えると高齢化と若年層の民謡離れから組織も減少傾向になっているが、出場希望は依然として変わらない。

追分文化の展開

先人の生き様が歌いこまれ、風土で育んだ追分が、民族の唄として社会的にも評価されるほど成長した。追分全国大会が定着したころには、民謡ではじめてNHK名曲のアルバムに放映、新日本紀行などメディアが挙って取材特集報道するようになった。

1986年（昭和61）には復元北前船の日本海回航2,500キロを実現、青坂満師匠が船頭役で江差追分を披露し反響を呼んだ。91年には世界の追分旋律6か国による世界追分祭を江差で開催、世界発信を実現、海外遠征にも結び付いた。

この推移をたどると、いち早く町を挙げて地域文化として取り組み、町民が誇りにしてきた意識によるところが大きい。いま、高齢化による会員減少傾向の中で、形式にとられることなく、追分に秘められた本質を次世代に受け継ぐ取り組みが求められている。

平成28年「函館文化会講演会」を開催します

～ 演題は「高松凌雲と箱館」～

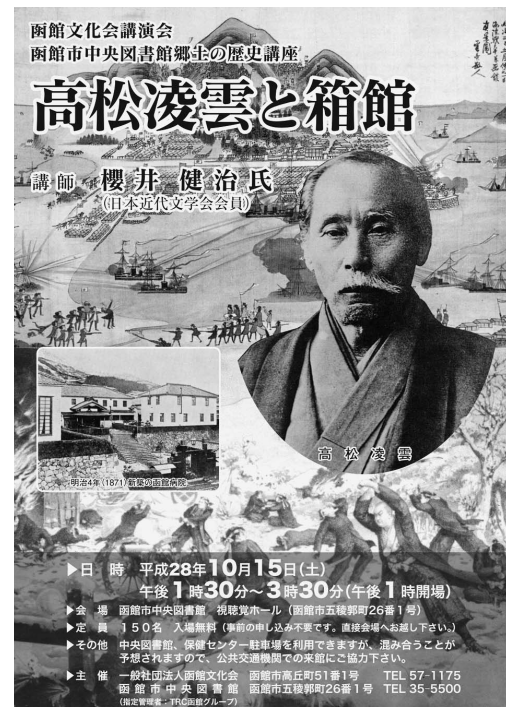
今年度も函館市中央図書館との共催で「函館文化会講演会」を次のとおり開催いたします。今回は日本近代文学界会員 櫻井 健治氏をお招きし、「高松凌雲と箱館」と題しての講演です。

現在の福岡県小郡市に生まれた高松凌雲（1837－1916）は、医師を志し上京、凌雲の学才を知った第15代将軍徳川慶喜は奥詰医師に登用、その後凌雲は欧州への外遊で大きく成長。薩長連合藩と幕府軍の戦闘に自ら旧幕臣として幕府再興に身を捧げるべきと判断し、榎本武揚らと行動を共にすべく箱館に入り、箱館病院の院長に就任したが、凌雲は医師として「欧州では負傷して戦闘力のない者は、敵味方の区別なくお互いに治療する」という精神をもとに、敵味方の分け隔てなく治療に専念しました。

近代国家夜明けの舞台となった箱館の地で、潮の香りをかぎながら、医学はもとより後世に様々な形でインパクトを与えることになった人間高松凌雲、今年は没後100年の節目の年にあたり、その人生の一端を知ることができるものと期待をしているところでもあります。会員皆さんはもとより、市民の方々にもお声がけをいただき、多数聴講くださいますようお願いいたします。

- **開催日時** 10月15日(土) 午後1時30分開演(午後1時開場)、
終了予定 午後3時30分
- **演 題** 「高松凌雲と箱館」
- **講 師** 日本近代文学会会員 櫻 井 健 治 氏
- **会 場** 函館市中央図書館 視聴覚ホール
(函館市五稜郭町26-1)
- **定 員** 150名(入場無料)

※事前の申し込みは不要です。直接会場にお越し下さい。
なお、中央図書館、保健センター駐車場を利用できますが、混雑することが予想されますので、公共交通機関でのご来館にご協力下さい。



● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けておりますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しております。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、FAX、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけませんか。「入会申込書」をお届けいたします。

● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っております。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ ①

～ テーマ「青函連絡船」～

函館文化会が取り組む「郷土の文化」の伝承に因み、毎年発行する会報に函館の歴史・文化をテーマ取りあげ、会員皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、今号から「函館の歴史と文化を語り継ぐ」を企画いたしました。

第1回目は「青函連絡船」をテーマに取りあげました。北海道の玄関口の役割を果たしてきた函館にとって欠かせない「青函連絡船」、その連絡船にまつわる思い出を4人の会員の方々から投稿いただきましたので、ご紹介いたします。

なお、次号(第79号)、第2回のテーマは「函館の坂道」です。「坂道」にまつわる皆さんの思い出やエピソードをお寄せ下さい。応募の要領等は、改めてお知らせいたします。



栈橋に係留されている旧青函連絡船「摩周丸」



青函連絡船は「はにゅうの宿」

小原幸男

ああ、あの顔であの声で♪
手柄頼むと妻や子が♪

ちぎれるほどに振った旗♪ 遠い雲間にまた浮かぶ♪

こんな歌が流行ったのが昭和15年である。この年長兄が出征した、通信兵志願だったので広島部隊への入隊であり連絡船での出発であった。函館栈橋でちぎれるほど振った日の丸の旗の中で、「ポー」と汽笛を鳴らして連絡船が出て行った。

そのためか母が仕事の合間に、風に乗って「ポー」と連絡船の汽笛が聞こえてくると仕事の手を休めてボンヤリとすることがよくあり、戦地に行っている長兄のことを思っているようであった。あの見送りの時の汽笛の音が母の耳の奥底にあったのだろう。

家業の葡萄酒工場が亀田港町にあり、4～5人の人が働いていた。戦争が厳しくなり、配給の煙草は1日6本、酒も焼酎も統制物資であったが、葡萄酒は統制物資でなかったため結構忙しかったようだ。

昭和17年のミットウエー戦を期に戦局は不利なものとなり、ガダルカナル、サイパンとますます厳しくなるばかりであった。そんな中で、葡萄酒を作る過程の副産物としてできる酒石酸の結晶が水晶に代わって電波探知機の主材料になると、酒石酸石灰が戦地での飲料水の浄化に使われるというので軍部から大増産の命令が下された。

「葡萄は一粒たりとも食わずに供出しろ」というのである。さあ、工場は大変である。昭和19年の秋には酒石酸を取るための葡萄酒の大増産となり、山葡萄などがどんどん持ち込まれた。また、葡萄の代金は銀行でいくらでも貸してくれた。

勤労奉仕隊の人たちと、供出された山葡萄で工場の中はごった返しである。愛馬進軍歌や愛国行進曲が流れ、勤労奉仕隊の中には鉢巻きに半纏姿の大門から来た香具師もいたりしててんやわんやである。

工場に入りきらない葡萄酒の発酵タンクには外に置いてシートを掛けたり、魚油用の大型タンクまで集める騒ぎである。

粗製乱造の最たるものでワインの品質管理どころではない。

醸造が終わり、タンクの壁に付着する酒石カリ塩の結晶や、タンクの底に沈殿する^{おり}澱は、今までは厄介な廃棄物であったが、これらを取るの^{おり}が目的である。これはまた扱いにくいもので、特にドロドロした澱は始末が悪いが、それを天日干しなどで乾燥させて袋詰めにするのである。

時々憲兵が見回りに来て袋の数を調べていく、そんなもの誰もごまかほしないのだが結構やかましいのである。

そんな作業が半年ほど続いて、翌20年の7月になって出荷された。量はどのくらいあったのか、その代金はいくらであったか、なにせ軍需物資なので記録は一切残されていない。

丁度その頃である。米軍の艦載機による函館空襲があった。7月14、15日の空襲により青函連絡船12隻のうち8隻が爆撃を受けて沈没、2隻が搁座炎上、2隻は被爆炎上した。

乗組員他乗客等あわせて429名が死亡または行方不明になり、負傷者は63名に達した。

この空襲で茂辺地の^{かっとし}葛登支灯台沖で駆逐艦「橘」が爆沈している。また、函館港を中心に青森県を含めて、汽船・機帆船合わせて41隻が沈没、40隻が搁座等損害を受けた。

市街地では駒止町12番地（現在の弥生町12 弥生小学校グラウンド）に爆弾3個と焼夷弾が投下され、弥生町、^{はたご}旅籠町、弁天町、船見町、鍛冶町（いずれも現在の弥生町）に火災が発生延焼し家屋169棟、384戸が焼失、死者14名、負傷者16名が出た。また、函館駅では投下された爆弾で鉄道郵便局員23名が爆死。一方、大門交差点の丸み精肉店にも爆弾が命中した。

そして終戦を迎えたのだがそれが後になって、夜の目も寝ないで生産して送り出した酒石酸と酒石酸石灰の原料が、あの連絡船空襲の被害に遭っていたことが分かった。親戚筋にあたる松田豊治氏が連絡船関係の仕事をしており、貨車の積み荷のことを知っていたのである。ただ、軍需物資のこと、親戚たりとも漏らすことは出来なかったのだが、松田氏も当時非番の時は工場に手伝いに来ていたので、酒石酸のことはよく知っていて関心があったとのことだった。

後になってその話を聞かされた父が、ただ一言「そうかね」といっただけだった。後にはほとんど売り物になりそうもない葡萄酒の不良在庫と、葡萄代金の借金が残った。

失恋をしてはじめて恋の本質が分かり、敗戦によっては



棧橋の乗船通路で改札を待つ人々
(北海道新聞社発行「さよなら連絡船」より)

じめて戦争の悲惨さが分かるのだ。

戦後昭和30～40年頃まで、所謂豆新聞というものがあつた。地域情報紙でタブロイド判4頁くらいの新聞を月1、2回出したり出さなかったりというものである。会社にも取材や広告を取りに来たりしていた。付き合わないとな何を書かれるか分からない。下手をするとラムネに大きな銀鍬を入れて写真を撮って載せたりするのである。そんな中に羽入某という人がいて、会社にも時々顔を出していた。この人はそのようなことをする悪い人ではなかったが、一時家賃を払えなかったのか、アパートを出されたらしく住所不定となった。

そんなことがあってか、羽入氏が夜になると午後8時近くの連絡船に乗り青森に行くようになった。午後11時半頃青森に着いて、折り返し青森発0時半の深夜便の連絡船で函館に戻ってくるのだ。昭和30年頃、青函連絡船の3等片道運賃が220円で、往復440円、入浴料が1回120円であった。当時、旅館に泊まると安くても800円から1,000円ほどであったので、連絡船の方が安上がりであったのだ。こんなことから、世間では彼の乗る青函連絡船を「はにゅうの宿」といった。



おばら ゆきお 昭和4年函館市生まれ。(株)小原に入社し、取締役専務理事、代表取締役社長、平成8年から取締役会長に就任。第18代函館青年会議所理事長、第53代函館ロータリークラブ会長など歴任

青函連絡船の思い出

船 矢 美 幸



青函連絡船は、函館に生まれ
(昭和8年)函館に育ち、人生の
終焉地と決めている私にとって体

内に棲みついている分身の様なもので、エピソードには事
欠かない。

出港の汽笛、銅鑼の響き、五色の紙テープ、タラップを
渡り入った船内のペンキの匂い、岸壁を離れる時の蛍の光
のメロディー、身を乗り出して手を振り名を呼び合う別れ
の光景、湾口の赤いブイ、遠ざかり、或いは近づく函館山
の全景をバックにした連絡船の勇姿はアラジンの魔法のラ
ンプの様にいつでも、呼べば眼前に現われる。

湯川の海辺から南西の方向にある函館山へ目をやると遠
い沖合に白い船が見え、消えてゆく。海峡の彼方に何か素
晴らしいものがある。海峡が運んでくる素晴らしいものに
憧憬の夢を膨らませて少女時代を過ごした。

昭和29年、学芸大学(現道教育大函館校)卒業の4月、
開局3年目のHBC編成局アナウンサーとなり、旧日魯ビ
ル5階に第一スタジオ(ラジオ劇場)と第二スタジオ(放
送用)があり、朝な夕な連絡船の汽笛と銅鑼の音が聞こえ、
原稿を書く机からは出港風景が眺められ屋上に五色のテー
プの切れ端が落ちている事があって、昼休みには皆でテー
プの色占い等をして楽しんだこともある。放送中は赤ラン
プが点灯していたスタジオに銅鑼の音が入ることはなかつ
たが、海猫の鳴き声と汽笛は日魯ビルのHBC時代の云わ
ばBGMで今も思い出の中で鳴っている。赤ん坊を背負っ
たねんねこ姿の若夫婦の故郷離れ、集団就職の中学生、ウー
ルのスカーフを被ったかつぎ屋の小母さん達、早稲田の耳
の張った大学帽の学生。三等船室へのタラップを渡ってい
った人達はどんな人生を歩んだのだろうか。

昭和29年8月、北洋博覧会が函館公園で開催され、実検・
試験TV放送が開始、天皇・皇后はお召艦の青函連絡船洞
爺丸にて来道。無事帰京されたが9月にはタイタニック号
に次ぐ海難史上未曾有の大惨事洞爺丸沈没の事件があり、
海上航路の危険さを戦中の爆撃と共に痛感した。

津軽海峡の真中辺りは海流の関係で揺れがひどくなり立っ



当時、HBC放送局が入っていた日魯ビルと函館棧橋

ていられなくなるので船客は椅子席を離れ、カーペット席
に横になる。晴れた日の甲板では思い切り走り、船の後
を追うイルカ達と競争した。楽しい光景だ。数え歳3歳の
私の冒険心で身内を困らせた大事件があった。昭和10年の
初秋、里帰りして東京へ帰る叔母に抱かれたまま、銅鑼が鳴
り、下船が促され、最後にタラップが外され、船が岸壁か
ら離れていっても、私はニコニコ、バイバイの手を振って
いた。まさかの私の出港に棧橋の母とお手伝いのツエチャ
んの号泣・私の名を呼ぶ絶叫も次第に遠のいていった。3
歳の私は小さなバスケットに明治の板チョコ一枚とハンカ
チを入れ、あらかじめ叔母に同行して上京するつもりだつ
たから、船のタラップが外されても、平気だった。その緊
迫の瞬間を覚えている。

その年の春、東京で結婚式を挙げた新婚花嫁が建築技師
の夫に内緒で、勝手にハンドバック一つで汽車に飛び乗り
連絡船で帰郷した理由が「姪のミユキに逢いたかったから…」
で、嫂の母はオロオロし、早速、仲人でもある東京隅田区
の母の実家に電報を打ち、義妹の婚家先に詫びを入れた。
上野駅ホームに、新婚の夫氏と母の母(祖母)、母の兄達
が出迎え、3歳のミユキは祖母達に引渡された。

ヴァイオリンと油絵と新劇が趣味の大正生れの義妹を、
東京下町育ちの古風な母は、「極楽トンボ」と渾名をつけ
「ミユキは叔母さんとそっくり」と嘆いた。私とはウマが

合う叔母はフランス留学を夢見たが、反対され断念。私には外国旅行を奨める進取の気性に富んだ個性的な人でそのDNAは私のものだ。

銅鑼を叩きながら見送り客達へ下船を促す白い服のボーイは居残り客がない様に、銅鑼を強く、速く叩き音色は迫力を増し、やがてタラップが外される。慌ててすべり込む男性もいた。あの日出港した船名は何丸だったろうか。

昭和34年は御成婚ブームの年であった。札幌本社からの転勤で再び函館放送局へ来たのは3月末。4月の中頃、一人の男性を紹介されたが、3年は蓄財と実力アップが目標で5月の連休は民放連との連絡を兼ねての上京で晴れた日の午後一人連絡船のタラップを登った。

出港にはまだ間があり、船のデッキに凭れていると、慌ただしく棧橋に現われた小柄な老婦人と長身の息子と思われる男性。おや?とっていると、一寸恥かしそうに、然し大胆にタラップを上って来るではないか。たじたじする私に、丁寧に頭を下げてから「お身体に気をつけて連休を楽しんで来てください」と真顔で云い、小柄な母親は「お帰りになったらお話を進めてまいりますのでよろしくお願ひします。」と慈愛に満ちた微笑を湛え丁寧に辞儀をされたので私は立ち往生。困惑し、感動し、混乱し、揺れる船内で海峡ラーメンを食べた。船が青森に近い仏ヶ浦に差

しかかる頃、同僚の網走放送局アナウンサーの棟方量子さんが微笑しながら「連休で上京するのだけれど、青森の叔父のところへ寄ってから」と云う。叔父とはかの板画の棟方志巧画伯である。「見たわ。婚約者のお見送り」と云って意味あり気に見つめる。連休明けを待たずに、「婚約者のお見送り情報」は社内に知れ渡り尾ヒレ話もついて盛り上った。

「私は主婦には向きません」と辞退したにも拘らず、6月に結納、8月入籍、9月挙式となり転勤6カ月足らずで、私の局アナ生活に幕が下りた。連絡船で新婚旅行に行った。3人の子育て一段落の昭和50年代、日本語の美しい華道家安達瞳子先生の董陶を受けたいと度々上京した。連絡船は真夜中12時出港で、ガラ空きの婦人席の常連はソロプチミスト創立メンバー、友の会の平塚千鶴子氏で、買物袋を手には普段着姿、上野に着いたら代官山のお宅の前でお買物だと云う。日魯漁業と昔の函館の話をなさる貴重な船旅だった。



ふなや みゆき 昭和8年函館市生まれ。大学卒業後、アナウンサーとして北海道放送（HBC）に入社、その後、俳句活動を続け函館俳句協会幹事など務める。昭和50年から函館朗読奉仕会会長



忘れられない「洞爺丸事故」

秋 保 榮

私が山形県から函館に来て、あこがれの青函連絡船の仕事に就いたのは18歳の時です。

それは廃船となった関釜連絡船景福丸を借り受け、宿泊、食堂、連絡船食堂の仕込み調理基地として経営していた鉄道弘済会船舶部に調理見習いとして職を得たからなのです。

調理室には、五島軒で調理長をしていた松川豊氏、佐々木銀之助氏をトップに、調理師10名ほどが働いておりました。その時代は教えてもらうのではなく、見て覚える時代の修業で、早く一人前になろうと懸命に働いたものです。

修行が明け、21歳で連絡船大雪丸に配属されました。食

堂の乗務員構成は、組長他7名編成です。勤務は二昼夜交代が基本で、食堂は1、2等と3等に分かれ、1、2等は高級感が溢れ格式高い食堂であり、メニューは、洋食が主体でありました。

その時代、本州と北海道の往来は連絡船よりありません。航海時間は4時間30分を要しました。便名によりますが、朝、昼、夜の食事時間帯はとても忙しかったものです。

船に配属されると、各所に挨拶をかねて船内を案内されます。その時、船橋（航海室）から見る連絡船はなんと大きかったことでしょうか。客室1、2等室の室内、ロビーの豪華さには驚かされたものです。

田舎から出てきて念願の連絡船で働くと、少なからず誇りを持ったものです。

ある日のこと修学旅行生が乗ってきました。季節的に6月の海峡は「なぎ」です。生徒達は甲板に出て、真っ青に続く海を見ていたとき、数十頭の「イルカ」の群れが連絡船に添うように飛び跳ね、その仕草に歓声を上げるその喜びようは計り知れないものがありました。そんな情景は連絡船の良き思い出であります。

海が穏やかなとき、航路跡に虹が浮かび、不思議な感情に馳せられます。

生徒達が下船する際、「あー!!これが北海道の玄関なんだ」との声にふと我に返り、私もこのようにして渡ってきたんだと感無量になったことを覚えております。

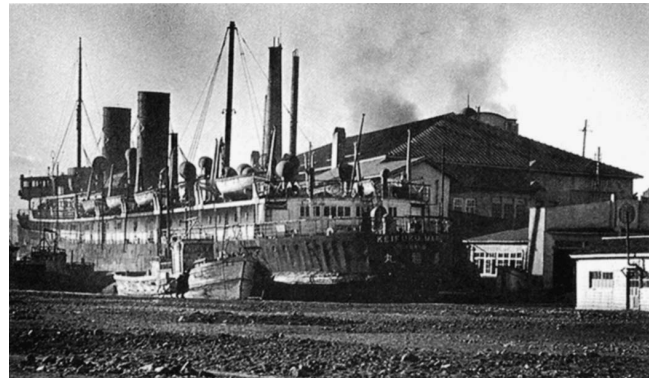
函館、青森間の運航は客船4隻が配置され、その中の1隻は臨時便でドックに入ったときの代航そして周遊船として運航しておりました。この時代の周遊は、主に下北半島です。青森港より出航して焼山を過ぎて断崖絶壁海拔100m余りの奇岩が仏像に似ていて、その幽境の美しさから「仏ヶ浦」と名付けられ、連絡船をその絶景のすぐ側まで近づけて、停船させて見せるのです。乗客の皆さんは、その自然の彫刻の素晴らしさに手を合わせ感傷に浸っているようです。こんな周遊の旅でした。

洞爺丸が昭和29年8月に御召船として栄誉を担いました。その1ヵ月後、洞爺丸は15号台風で遭難転覆、乗客・乗員1,155人が犠牲となり、大惨事であったのです。

私は偶然にも乗務していたのです。と云うのは、乗務すべき調理員が、「体調を崩し休ませて欲しい」との連絡があり私は快く引き受けました。点呼の際、台風が近づいているとの情報を聞いており、密かに今日の海峡は揺れるだろうと覚悟をしておりました。

船は、定刻より3時間ほど遅れ岸壁を離れ出航したのです。未だ台風の勢いは衰えず、港外に出ると海は荒れ狂い、これまで経験したことがない波風です。突然船の電灯が消え不安が募ってきたのです。それでも、この連絡船が沈むと云うことは想像がつくはずありませんでした。

洞爺丸は横倒しになり浸水してきたのです。大勢の乗客から「助けて!!」と叫ぶ声が聞こえるのですが、私の力ではどうすることも出来ませんでした。私は、船が横倒しになっているので、テーブルの脚に捕まっておりました。そ



函館棧橋に係留されていた景福丸

の時、大きな波が押し寄せて身体が小さな窓から海中に放り投げ出されたのです。

救命胴衣を着けていたので浮き、死への恐怖に襲われましたが、生きたいとの思いが募ります。大波に打たれ海中深く引きずり込まれ、次に大波が来たらダメかと諦めた瞬間、足が砂浜に流れ着いていたのです。あたりは真暗ら闇です。必死で浜によじ登り、疲れから意識を失ったのです。

気がついたときは病院のベットの上でした。生と死の狭間をさまよい、生存出来たのは神仏の加護のお陰でしょうか。私は、3ヵ月程療養をして職場に復帰したのです。私の精神状態を考えてくれ、景福丸で仕事を続けました。

青函航路に新鋭の新造船十和田丸が就航することになりました。昭和32年9月、函館港には大勢の市民が見学に訪れました。この船の調理長に26歳で抜擢されました。船は近代化され石炭が重油に変わり、調理室には一般にはまだ普及されていない電子レンジが備えられ、新造船に相応しい装いでした。私もお客さんに喜ばれる料理を提供しようと心掛け、励みました。

乗船して気づいたのは、私には洞爺丸事故の残像が脳裏から離れないことでした。辛いのは夜に一睡も出来ない、そんな日が続きました。そんな様子を妻が気遣い、妻の母が経営している湯の川温泉割烹旅館「ふじ万」で働くよう勧められ、連絡船に未練はありましたが、退職することとなりました。

15年間働き、去る日には万感の思いが去来して、熱いものがこみ上げてきました。これからは第二の道だと心に誓い、32歳の新しい一歩を踏み出したのです。

私にとって生涯忘れ去ることが出来ないのは、洞爺丸事故のあった9月26日です。何を置いても七重浜の慰霊碑に

花を供え、御霊よ安らかにと合掌。砂浜に出てお酒を海に注ぎ同僚に成仏して下さいと願うのです。その時は、泣けて涙が止まらず、また泣けてくるのです。このことは終生私に課せられた宿命だと思っております。

知人から、洞爺丸の悲惨な事故について、人々の記憶が薄れていく中、大惨事を風化させてはならないと云われ記憶をたどりながら、平成24年11月に『洞爺丸 生還した料理人』と題する著書を出版したのです。

青函連絡船も80年の輝かしい足跡を残して終わりを告げ、

その役割を青函トンネルに譲り、今年3月26日から青函トンネルを北海道新幹線が走りバトンは引き継がれていったのであります。



あきほ さかえ 昭和8年山形県生まれ。鉄道弘済会に入社し、「景福ホテル」や青函連絡船で調理師として勤務。同会退職後、「割烹旅館ふじ万」を継承、函館市食品衛生協会指導員などを歴任



我が人生と「青函連絡船」

山 那 順 一

北島三郎氏と連絡船

平成28年7月、北島三郎、吉幾三、石川さゆり主演の、NHKテレビ「北の大地コンサート2016・はるばる来たぜ北海道新幹線」が、全道と全国に2回放映された。

収録は6月15日市民会館で行われたが、前日の14日に北島三郎（本名・大野稜）氏が、連絡船で歌手を目指して上京する回想シーンの撮影が行われた。

私と北島氏は、西高校同期で水泳部の仲間。撮影後の夜にホテルでのNHKスタッフとの夕食会に招かれた。

その日の撮影は、北島氏が青函連絡船記念館摩周丸の船上で行われ、歌手を夢見て1人で上京する彼を見送りに来た父親と、棧橋とデッキで涙を流しながらテープを投げ合った…という思い出を語るシーンを撮影したとのこと。

その話を聞いて、私は「いや、父親のほかに、もう1人泣きながら手を振って見送った初恋の女性がいましたよ。」と話すと、驚いたデレクターやスタッフは「エ！本当！撮り直しましょうか？」。北島氏はじめ皆で大笑いになった。

かつて「スポーツニッポン」紙に30回連載した北島氏の自叙伝でも、見送りは父親1人になっているので、事務所では1人で見送ったことを通説にしているようだ。

連絡船と棧橋

出航5分前に船内旅客掛が銅鑼を叩いてデッキを廻り、新婚旅行出発の喜びのテープ、悲しい別れのテープ、悲喜

交々のテープと、泣き笑いの人生模様が見られた場所でもある。

私の市役所同期生の結婚式は、主に五島軒本店で祝賀会を行った。9時頃に会が終わり、近くの銀映座で映画を見て、0時15発の連絡船で、新婚夫婦を見送るのが通例であった。

連絡船のデッキに立った新郎新婦に、棧橋から大声で冷やかしたり、ひわいな激励や声援するのが恒例で、私はこれが嫌で、湯川に1泊して翌朝の連絡船で旅立った。

連絡船と敵潜水艦

戦況厳しくなってきた昭和19年春、私は妹と2人で母の実家（石川県大聖寺町：現・加賀市）へ疎開させられたが、昭和20年7月疎開先の都合で函館に戻るようになった。

迎えに来た両親と4人で乗ったのは客車でなく、やっと4人座れたすし詰めの貨車。



進学、就職、転勤シーズンの見送り風景
（北海道新聞社発行「さよなら連絡船」より）

煤まみれのまま青森駅に着き、長時間待たされた挙げ句、夜に乘ることが出来た連絡船は、津軽海峡に入ると、アメリカの潜水艦をかわす為、ジグザグ航行を続けた。

灯火管制下の3等船室は薄暗く、無事に函館に着くかどうか判らないと言う話に、乗客の念仏を唱える声や、すすり泣く声などで、不安な長い夜を過ごした。

朝方、無事に函館港外に到着したが、何故か棧橋へ接岸せず長時間沖に停泊。海水で炊いたと思われる塩辛いご飯が乗客に提供されたが、私は全く喉を通らなかった。

上陸した翌日の13日と14日に、米海軍艦載機グラマンの機銃掃射を自宅で受けた時、何のための疎開、何のための連絡船での苦勞、と思ったものだ。

景福丸

全連絡船が米海軍艦載機で壊滅状態となったため、関釜連絡船として運航していた景福丸（総トン数3619噸：乗客定員945人）が、昭和20年に青函航路に就航した船で、私がこの船に初めて乗ったのは、昭和23年6月弥生小学校の弘前への修学旅行の時だ。

偶々この船の機関長の子が私と同じクラスにいて、機関長が船内を案内してくれた。

機関室に降りると、正に灼熱地獄の暑さ。機関員4～5人が上半身裸で、吊してある大きな籠の塩を舐めながら、赤々と燃える2つの大きな釜に、大きなシャベルで石炭をくべていた姿は、強烈に印象に残っている。

この船は、昭和25年から昭和31年まで、函館棧橋脇で海上ホテルとして営業して、私は泊まることはなかったが、函館棧橋に行くたびに、当時のことを思い出していた。

青森棧橋と列車ホーム

母の実家の大聖寺町（現：加賀市）へ小・中・高時代はよく遊びに行った。特に、高校時代は、金沢大学を受験しようと思っていたので、成人前に十数回は行き来したと思う。

終戦直後は、進駐軍の兵士からDDTの粉末をかけられた事や、連絡船が青森棧橋に着くやいなや、ホームの列車めがけて人々をかき分け、汗まみれになりながら走った事等は、忘れられない思い出だ。

昭和30年市役所に就職、3年後秘書課勤務となり、30年代40年代には上司に随行して、重い土産を背負い、何度連

絡船乗ったか計り知れない。随行時には、寝台車の切符が入手済みなので、青森駅棧橋を走ることはなかったが、ホームの列車までの長い距離を運ぶ背中の土産の重さは、骨身に浸みたものだ。

連絡船廃止そして新幹線

昭和63年青函トンネルが開通し、連絡船は廃止された。市民の中に存続の運動が活発になり、函館市も存続運動に参加せざるを得ない状況であったが、青函トンネルの活用を考えると、私は個人的に存続には反対だった。

トンネル開通記念のイベントとして、大門から駅前に至る国道を会場にして、松風町の交差点に舞台を設け、市電の線路敷地内と両側の道路に、ゴザや新聞紙等を敷いて、北島三郎歌謡ショーが開催された。大門・駅前界限はかつてないほどの賑わいを見せ大勢の観客で溢れた。

そして、今年の3月26日、待望の北海道新幹線が開通した。開通式典や各種開通イベントのテレビや新聞報道を見て、私は、違和感を抱かざるにはいられなかった。何故なら、単に駅の所在地であるだけのトップばかりを、マスコミや北海道、JRが大きく取り扱って工藤函館市長の出番が無かったからだ。

周辺の自治体があまり関心の無い中、そして、与党の代議士が不在の中、木戸浦市長、井上市長、歴代市議会議長、高野商工会議所会頭や市の経済界が、新幹線の誘致と予算獲得の為に懸命に努力して、やっと実現した成果であり、今でも函館市民の中にスイッチバック方式で、現函館駅に新幹線を、と言う声が上がっているのも蓋し当然…と、言っではみたものの、所詮は「引かれ者の小唄」。

ともかく、鬼籍に入った木戸浦市長、高野商工会議所会頭両氏の努力と尽力に、心から感謝と敬意を表すると共に、井上市長には、元気になって、誘致した新幹線に乗って頂きたいと願っている。



やまな じゅんいち 昭和10年函館市生まれ。函館市に勤務し、商工観光部長、企画部長、収入役、助役（現副市長）などを歴任し平成12年退職。現在、函館方面交通安全協会会長

特別寄稿



日魯創業100年に思う

加藤清郎

(ニチロ会 顧問)

明治40年6月4日、163トンの西洋式帆船宝寿丸が、若き二人の青年の夢と希望を乗せ、新潟・信濃川河口をカムチャッカに向け出港した。二人の青年とは27歳の堤清六と26歳の平塚常次郎である。

この日から遡る事一年前の夏、平塚青年は、ロシア領アムール河の河畔、間宮海峡に突き出たブロンゲ岬に粗末な漁舎を立て、20人程の漁夫と共に買魚と漁労に従事していた。明治38年の日露戦争勝利によるポーツマス条約の締結で、日本はロシア領に於ける漁業権を得、晴れて本格的な出漁が可能となっていたのだ。

函館に生れた平塚は、伯父の平塚時蔵（函館経済界四天王の一人）に育てられ、長じて札幌の露清語学校でロシア語を学び、先輩からの誘いでブロンゲ岬に渡った。そこに、旅にくたびれた背広服に鳥打帽、半ズボンに長靴というこの辺の漁場には見慣れない風体の日本人青年が訪ねてきた。平塚より一歳年上の堤清六であった。

新潟県三条町の呉服屋に生れた堤は、ロシアとの貿易を思いたち雑貨見本を持ち各地を廻っていたが、日本人が居ると聞いて尋ねて来たという。堤はこの漁舎に三日間滞在し、平塚と生活を共にした。二人の青年は、豊富なさけ・ます資源とその将来性など語り合ううちに意気投合し、帰国後の再見を約し別れた。三条に戻った堤は、北洋漁業への参画について両親や親戚を説きふせ12,500円の資金を集め、新潟市に堤商会（日魯漁業(株)の前身）を設立、6,550円を投じて入手したのだが西洋式帆船宝寿丸だった。新潟を出た宝寿丸は函館で物資等を積み込み北上、一カ月余の難航の末カムチャッカ半島西海岸に到達する。ここで魚を満載し、函館で売りさばき新潟に帰港した。運命的なブロンゲ岬の出会いから一年後、二人の興した企業は、明治・

大正・昭和にかけて日本経済の一翼を担い、函館はその基地として大きく発展していったのである。漁獲量は順調に増え、事業の見通しも立ったが、カムチャッカに多い紅さけは当時日本では下級品扱いを受けていた。対策として、ヨーロッパでは喜ばれている紅さけを缶詰にしよう…と明治43年、現地に手工業的な缶詰工場を建設、紅さけを主体に704函の缶詰を生産した。これがDAY BREAK BRAND（あけぼの印）としてヨーロッパで名声を博し日魯さけ缶詰の誕生となった。その後、東カムチャッカ・オゼルナヤに米国製最新式の高速自動式缶詰機械を据えつけるなど増産体制を整えた。

しかし、混迷したロシアを相手に、また荒涼たる厳しい北洋の自然との闘いはなお前途に幾多の困難が待っていた。加えて昭和6年、妹と結婚した事で義兄ともなっていた堤清六の急逝は、平塚にとって我が両腕をもがれた思いであった。だが平塚の不屈の精神はこれを乗り越え、事業を推進していった。

昭和20年、敗戦により我が領土の千島列島・南樺太はロシアに占領され、北洋全土の工場を失い、従業員約2,300名は抑留された。国の戦争の果てとはいえ、平塚が40年に亘って築きあげてきた北洋に於ける事業の全ては一瞬にして哀失したのである。平塚はこのときも、いささかも意気消沈の色を見せず、社内幹部を督励し、焦土の中から不死鳥の如く立ち上がった。平塚は、北洋を失っても将来公海に於ける漁獲の道は残されておりそれ迄のつなぎとして既存の陸上かに缶詰工場を中心に、現有の社員と資産を活用し、函館支社のもとに13ヶ所の事業部を設立し、函館支社長 堤清治郎を先頭に事業に着手した。昭和27年待望久しいさけ・ます母船漁業が届開され、翌昭和28年には母船式かに工船漁業も再開された。両事業共昭和30年代に入り

隆盛を極め、加えて昭和36年、母船式刺し網漁業の初出漁を機に北洋トロール事業は大きく成長・発展した。そしてこれ等の事業により、昭和30年代の北洋漁業全体の生産量は増大し社業に大きく貢献した。しかし昭和50年代の200カイリ時代に入り、規制の強化等により漁獲量は激減し、かに母船事業は昭和59年、さけ・ます母船事業は昭和63年、そして、北洋トロール事業は平成3年とすべての事業から撤退し、これをもって北洋全域での事業の幕は降ろされた。北洋漁業が函館の経済に与えた影響は、各関連業界に及び、出漁の時期が迫ると街は活気づき、ピーク時の経済効果所謂北洋景気は約70億と云われ、函館の復興を支え続けた。

昭和4年に竣工し、43年間北洋漁業の基地として本社の機能を果し、その間会社の繁栄と苦悩の歴史を検証してきた日魯ビル一号館も、昭和47年解体され、函館国際ホテルとして生まれ変わり平成12年本社函館事務所も閉鎖となった。

平成19年、㈱ニチロは創業100周年を迎え、6月に東京で記念展が、9月には函館市立北洋資料館で「街と歩んだ北洋漁業」のタイトルで特別企画展が開催され、期間中300名余の来場者で終日賑わい、改めて函館市民との交わりの深さを実感した。折しも当年12月ニチロ・マルハの経営統合が発表された。以上に鑑み、ニチロOB会創立40周年に当たる平成20年に「函館支社とニチロ会の歩み」と題した記念誌を、更に平成24年には「日魯創業100年の軌跡」の小冊子を発刊した。平成25年4月、ニチロビル二号館の一室にニチロ会所蔵のパネル類、日魯華やかなりし頃の写真集、会報等々に、函館市立博物館より拝借の数々の貴重な展示品を加えて展示し、資料室として開放、「日魯倶楽部」と命名、一般公開し多くのメディアにも取り上げられたが、貴重な展示品の管理上の問題もあり、二年後の平成27年3月末日をもって閉鎖された。

これを機に、改めて日魯が歩んだ歴史の重さを検証すると共に遺された貴重な資料・展示品等を管理し、編集・データ化して栄光の日魯100年の歴史を後世に伝承すべく、体制を整え努力する所存であります。



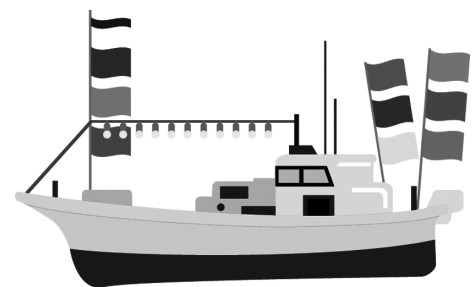
昭和24年、日魯より持ち込まれた宝寿丸を背景にした一葉のモノクロ写真が、七飯町・木村捷司画伯(1905-91)により色彩が加えられ油彩キャンバスとして蘇った。中央右から3人目が堤清六、前列右から3人目が平塚常次郎

(参考文献)

- ・日魯漁業株式会社経営史(第一巻・二巻)
- ・堤清六の生涯。函館市史
- ・ニチロ会創立四十周年手記記念



かとう きよお 昭和9年函館市生まれ。日魯漁業㈱に入社し、販売部門を担当、取締役東京支社長、その後函館国際ホテル社長を最後に退職。函館日米協会会長、函館バトミントン協会会長、ニチロ会会長など歴任



平成27年度 函館文化会 事業報告及び収支決算

5月24日に開催されました平成28年度定時総会において、平成27年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、決算報告等についてのお問い合わせ及びご意見・ご要望がありましたら事務局にお寄せ下さい。

平成27年度 函館文化会事業報告

1 郷土史研究者奨励事業の実施

(1) 「神山茂賞」の贈呈

- ・日 時 11月7日(土) 午前11時
- ・会 場 五島軒 本店
- ・贈呈者 神山茂賞 松村 隆 氏
(贈呈式後、受賞者を囲み祝賀会を開催)

(2) 函館文化会講演会

- ・日 時 10月19日(土) 午後1時30分
- ・会 場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
- ・演 題 開港地函館に見る芸術・文化
～かつての函館はアートの最先端だった～
- ・講 師 大下 智一 氏
(北海道立函館美術館主任学芸員)

(3) 講演録の発行

函館文化会講演会

(平成24年10月20日開催の講演会記録)

- ・演 題 「幕末函館の優れた人物像」
～19世紀の箱館で時代のリーダーとして
新しい日本を造った人たち～
- ・講 師 小林 裕幸 氏
(函館大学講師、元札幌テレビ函館放送局長)

(4) 会報の発行

「会報77号」を10月1日発行

2 郷土文化振興事業の協力・助成

(1) 後援事業

- * 「江戸に魅せられた作家～宇江佐真理の世界」
- * 第60回北海道奎星書道展覧会
- * 第13回青春海峽文学賞
- * 古典をたのしむ「枕草子～をかしの世界」
- * 第92回赤光社公募美術展
- * 「小さな親切」作文コンクール 以上 6事業

(2) 協賛・助成事業

- * 第60回北海道奎星書道展覧会
- * 平成27年度函館野外劇
- * 第13回青春海峽文学賞

* 函館朗読奉仕会朗読会

* 図書「願乗寺川」出版

* 第91回記念赤光社公募美術展

* 「小さな親切」作文コンクール 以上 7事業

3 会 議

○ 総 会

(1) 定時総会

5月26日(火) 於：五島軒 本店

出席状況：会員総数 90名

出席会員 73名 (内委任状提出31名)

(議 題)

ア 議 案

* 平成26年度事業報告について 承認

* 平成26年度収支決算について 承認

イ 報 告

* 「函館文化会講演会」の開催について 了承

ウ 卓 話 (総会議案審議終了後)

・演 題 願乗寺川物語

・講 師 郷土史研究家 木村 裕俊 氏
(平成25年神山茂奨励賞受賞者)

(2) 臨時総会

2月23日(火) 於：ロワジュールホテル函館

出席状況：会員総数 94名

出席会員 78名 (内委任状提出38名)

(議 題)

ア 議 案

* 函館文化会事務所の移転について 承認

* 平成27年度収支補正予算について 承認

* 平成28年度事業計画について 承認

* 平成28年度収支予算について 承認

イ 報 告

* 今後の日程について 了承

ウ 卓 話 (総会議案審議終了後)

・演 題 悪戦苦闘で単独完歩した“江戸五街道”

・講 師 箱館歴史散歩の会主宰
中尾 仁彦 氏
(平成26年神山茂奨励賞受賞者)

○ 理事会

(1) 第1回理事会

5月26日(火) 於：五島軒 本店

(議題)

ア 協議事項

*平成27年度定時総会提出議案について

承認

*神山茂賞顕彰規程の一部改正について

承認

*会員の異動(加入)について

承認

イ 報告

*「函館文化会講演会」の開催について

了承

*今後の日程について

了承

(2) 第2回理事会

9月25日(水) 於：ロワジュールホテル函館

(議題)

ア 協議事項

*「平成27年神山茂賞」について

承認

*会員の異動(加入)について

承認

イ 報告

*「函館文化会講演会」について

了承

*定款第23条第5項の規定に基づく報告について

(会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告)

了承

*今後の日程について

了承

(3) 第3回理事会

11月7日(土) 於：五島軒 本店

(議題)

ア 協議事項

*函館文化会事務所の移転について

承認

*函館文化会のあり方に関する検討について

承認

*会員の異動(加入)について

承認

(4) 第4回理事会

1月20日(水) 於：五島軒 本店

(議題)

ア 協議事項

*函館文化会事務所の移転について

承認

*平成27年度収支補正予算について

承認

*函館文化会のあり方に関する検討について

承認

*平成28年度事業について

承認

*会員の異動(加入・退会)について

承認

*今後の日程について

承認

イ 報告事項

*平成27年度事業実施状況について

了承

*平成27年度予算執行状況について

了承

*「卓話」の開催について

了承

(5) 第5回理事会

2月23日(火) 於：ロワジュールホテル函館

(議題)

ア 協議事項

*平成27年度臨時総会提出議案について

承認

*函館文化会定款の一部改正について

承認

イ 報告事項

*定款第23条第5項の規定に基づく報告について

(会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告)

了承

*会員の異動(退会)について

了承

*今後の日程について

了承

○ 諸会議

(1) 神山茂賞選考委員会

平成27年度受賞候補者として3件の推薦があり、8月7日(木)及び9月3日(水)に選考委員会を開催、選考の結果「松村 隆氏」を神山茂賞受賞候補者として答申することとした。

(2) 理事懇談会

函館文化会事務所の移転を機に、事務事業の見直しを含め今後の函館文化会の進むべき道を検討のため、全役員による「理事懇談会」を11月24日(火)、12月10日(木)の2回開催し、「函館文化会のあり方について」一定の方向付けをした。

(3) 企画委員会

函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度は6回の委員会を開催(持ち回り委員会を含む)、主なる実施・担当した事業は次のとおりである。

- ・文化講演会の開催協議及び運営
- ・「卓話」の講師の選任及び運営
- ・「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査

平成27年度 函館文化会収支計算書

平成 27 年度 収 支 計 算 書

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	対 予 算 比	備 考
I 事業活動収支の部				
1 事業活動収入				
基本財産運用収入	5,186,000	5,314,300	128,300	
会 費 収 入	180,000	176,000	△ 4,000	
事 業 収 入	12,000	0	△ 12,000	
寄 付 金 収 入	1,000	0	△ 1,000	
雑 収 入	12,000	23,024	11,204	
事業活動収入計	5,391,000	5,513,324	122,324	
2 事業活動支出				
(1) 事業費支出	3,860,000	3,935,001	△ 75,001	
①文化振興事業	2,805,000	2,897,666	△ 92,666	
事務手当	1,374,000	1,374,000	0	
顕 彰 費	100,000	100,000	0	
会 議 費	420,000	417,462	2,538	
旅費交通費	220,000	181,290	38,710	
通信運搬費	50,000	51,569	△ 1,569	
什器備品費	10,000	0	10,000	
消耗品費	20,000	45,910	△ 25,910	
修理修繕費	10,000	0	10,000	
印刷製本費	220,000	326,376	△ 106,376	
委 託 料	20,000	0	20,000	
賃 借 料	100,000	86,940	13,060	
諸 謝 金	80,000	77,959	2,041	
広 告 料	1,000	0	1,000	
助 成 金	100,000	100,000	0	
雑 費	80,000	136,160	△ 56,160	
②土地賃貸事業	1,055,000	1,037,335	17,665	
事務手当	225,000	225,000	0	
通信運搬費	5,000	6,794	△ 1,794	
租 税 公 課	750,000	744,100	5,900	
振替手数料	65,000	60,010	4,990	
雑 費	10,000	1,431	8,569	
(2) 管理費支出	1,892,000	1,909,820	△ 17,820	
事務手当	621,000	621,000	0	
会 議 費	50,000	109,057	△ 59,057	
旅費交通費	100,000	110,200	△ 10,200	
通信運搬費	167,000	216,534	△ 49,534	
什器備品費	10,000	0	10,000	
消耗品費	30,000	69,246	△ 39,246	
修理修繕費	10,000	0	10,000	
印刷製本費	69,000	69,440	△ 440	
委 託 料	410,000	382,353	27,647	
賃 借 料	170,000	110,000	60,000	

科 目	予 算 額	決 算 額	対 予 算 比	備 考
租 税 公 課	100,000	99,800	200	
負 担 金	50,000	45,000	5,000	
雑 費	105,000	77,190	27,810	
事業活動支出計	5,752,000	5,844,821	△ 92,821	
事業活動収支差額	△ 361,000	△ 331,497	29,503	
II 投資活動収支の部				
1 投資活動収入				
特定預金取崩収入				
神山茂顕彰積立金取崩収入	200,000	200,000	0	
郷土資料等整備積立金取崩収入	200,000	200,000	0	
特定預金借受収入				
郷土資料等整備積立金借受収入	300,000	600,000	300,000	
投資活動収入計	700,000	1,000,000	300,000	
2 投資活動支出				
特定預金返済支出				
郷土資料等整備積立金返済支出	300,000	600,000	△ 300,000	
投資活動支出計	300,000	600,000	△ 300,000	
投資活動収支差額	400,000	400,000	0	
III 予備費支出	0	0	0	
当期収支差額	39,000	68,503	29,503	
前期繰越収支差額	96,000	218,547	122,547	
次期繰越収支差額	135,000	287,050	152,050	

〈注記事項〉

- 「予算額」は、2月臨時総会において議決された補正後の額。
- 特定活動収支の部 特定預金取崩収入は、次のとおりである。
「神山茂顕彰積立金取崩収入」は、「同積立金のうち200,000円」を取崩し、「事業活動収支の部 事業活動支出 事業費支出 文化振興事業 顕彰費に100,000円、贈呈式関係経費に100,000円」に「郷土資料等整備積立金取崩収入」は、「同積立金のうち200,000円」を取崩し会報発行等経費に100,000円、事務所移転経費に100,000円を充てたものである。
- 当初予算に計上した「予備費50,000円」は、補正予算で全額事務所移転経費に充当した。

一般社団法人 函館文化会 会員

(平成28年10月1日現在)

(ア)	小野 沢 猛 史	(ス)	中 野 達 弥	松 本 昭 一
秋 保 榮	小 原 幸 男	末 永 玲 子	中 村 朝 山	松 村 一 隆
東 仲 江		菅 野 剛 信		松 谷 勇 競
厚 谷 享 子	(カ)	澄	(ニ)	丸 藤
	葛 西 善 一 郎		西 澤 勝 郎	
(イ)	梶 原 佑 倅	(セ)	丹 羽 秀 人	(ミ)
池 上 信 廣	加 藤 清 郎	関 口 昭 平	(ネ)	三 浦 稔 昌
池 見 厚 一	金 山 正 智		根 津 静 江	宮 崎 昌
石 井 直 樹	叶 邦 武	(タ)		
石 田 恒 彦		田 井 中 和 子	(ノ)	(ム)
	(キ)	平 昭 世 男	信 田 利 之	向 出 清 治
(ウ)	北 原 善 通	高 市 一 道 也	野 又 肇	棟 方 次 郎
上 田 昌 昭	杵 屋 勝 幸 恵	高 市 道 也		村 上 英 彦
	木 村 裕 俊	太 刀 川 善 一 子	(ハ)	
(エ)		辰 村 和 志	橋 田 恭 一	(モ)
繪 面 和 子	(コ)	谷 村 志 朗	浜 谷 内 節 子	毛 利 悦 子
遠 藤 正 夫	小 林 明 幸	田 村 志 朗	原 眞 人	
	小 林 裕 幸 助	(チ)		(ヤ)
(オ)	小 駒 井 千 尋	千 葉 軒 岳	(ヒ)	安 島 進 子
近 江 茂 樹			平 野 利 明	山 田 涼 一
近 江 幸 雄	(サ)	(ツ)	平 原 康 宏	山 那 順
大 島 安 長	櫻 井 健 治	辻 喜 久 子	(フ)	(ヨ)
大 瀧 俊 征 子	佐 々 木 馨 克	土 家 康 宏 彦	藤 井 方 雄	吉 田 恵 悦
岡 田 弘 金 哉	佐 々 木 俊 克 郎	坪 山 元 彦	藤 井 良 江 男	
小 笠 原 孝 愈	佐 藤 公 史 人	(ト)	札 内 征 幸	(ワ)
小 笠 原 信 治	佐 野 史 美 千	富 田 秀 嗣	船 矢 美 幸 太郎	若 柳 英 美 代
沖 野 武 弘	澤 田 美 千		古 野 柳 太郎	若 山 直
小 山 内 武 弘	(シ)	(ナ)	(マ)	渡 邊 兼 一
落 合 治 彦	島 津 彰	中 尾 仁 彦	松 崎 満 洲 夫	渡 利 正 義
落 合 良 治		中 野 晋	松 崎 水 穂	

(以上 99 名)

編集後記

- ◇「函館文化会・会報」第78号をお届けします。「会員に読まれる会報」、「会員が参加する会報」を目指して取り組んだつもりです。ご一読いただきご意見・ご感想をお寄せください。
- ◇講演会、市民公開講座、卓話をお願いした講師の先生に、それぞれ概要を会報にお寄せいただきました。コンパクトに纏められて当時を思い出させるものとなりましたが、ページの制約からご苦勞の多い作業となったことと思います。感謝申し上げます。
- ◇初めての企画「特集・函館の歴史と文化を語り継ぐ」…。会員から投稿はあるのか心配しておりましたが、4人の皆さんからテーマとなった「青函連絡船」の思い出、エピソードをお寄せいただきました。読ませてもらいながら、「そんなこともあったなあ」、「そんなこともあったんだあ」と思い出が蘇り、やはりこれらは後世に伝えておくべきだと

感じたのですが…。

- ◇会員の加藤清郎氏から「日魯創業100年に思う」の寄稿をいただきました。ありがとうございます。郷土にまつわる歴史や文化について、これからも会員皆さんからの投稿を期待したいと思います。
- ◇本日現在の会員数は99名、後一步で100名の壁を乗り越えられるのですが、1名加入してくれると、1名が転出で退会とこの壁をなかなか乗り越えられない。壁を乗り越えると一緒に会員数は増えるはず…、会員増強にご協力ください。
- ◇函館文化会の事務所移転から凡そ半年。訪れてくれる方から「いい眺めだね」と事務室の窓から三森山や横津連峰の山々に目を向ける。一度、この絶景を眺めにお立ち寄りください。しかし、環境が良すぎるのが徒となって仕事が捗らないのも現実…。(編集子)